續々載　下

續千載和歌集巻第十一

恋哥一

女につかはしける　　兵部卿元良親王

天雲のはるかに見えし峯よりもたかくそ君を思ひそめてし

久安百首哥に　　皇太后宮大夫俊成

うつりやそ思ひかねぬる恋はゑぬる物とそしりける

家百首哥合に初恋　　後京極摂政前太政大臣

知らせし我恋草やしけるらん時しもわかぬ袖の露をは

嘉元百首哥奉りし時同忍恋を　　権中納言公雄

恨わひは月のたに袖さへもしらせぬまても物思ふ之

初寄縁恋といふことを　　後宇多院御製

ふもしらぬ名をとりさきの草木ゆりに鶏つる

百首哥召されし次に

山鳥の初尾のかゝみ一目見し倚さすむ人の恋しき

恋哥中に　　後光明照院前関白太政大臣

落まし涙は袖にあまりてつゝむとも猶やしられん

百首哥奉りし時　　前右大臣

あひ見てもなほ涙のいかならん手つまにまかせ袖は
一
涙川袖をぬらすもかくの契をちかふ中川の水
藤原行房朝臣
弘安内裏百首歌に寄火恋
前大納言為氏
さればこそほのかにきえぬ難波人わか焼くあしのけぶり
なりとも
藤原盛徳
烟にもたてぬはかなし蜑の焼く藻の煙の下もえ
前参議実俊
かりそめにたえてそめし煙の下焼く蟹のひとりこがるる
藤原宗経朝臣
知らすやと思ひのまことなけきまちわびぬる中々にたえぬ命を
恨みてもなほや中々人の心にはなれぬものかは
藤原重顕
おもへ百首歌よみ侍し時恋
昭慶門院一条
君によし思ひつつこそ涙のそでの人まの袖をもぬらしまし
昭訓門院春日
せきかねし袖そつゆ我袖に思ひいつる涙こそ涙なれ
うち
春日社によみて奉りける中に

前大納言為世
忍ふれと何につゝまし涙こそしれ袖にせくとも
弘安百首歌奉りし時

典侍親子朝臣
涙とも見なしつゝまし我袖にかゝる思ひと人の数ならは
題しらす

式乾門院御匣
年をへて我のこゝろは紅の袖にかゝれる涙しれ里

千五百番歌合に
前大納言兼宗
人しれぬ思ひはいかにくるしきも涙は袖に出はいかにかるらむ

百首歌奉りし時
前右大臣
人しれぬ思ひはわかれ涙こそ色にも出てしられもそすれ

恋歌中に
中宮宣旨
落まさる涙も人に知れぬとも袖の色かはるとも

贈従三位為子
枕にもしられて今はよのつくも人め計をせきてつゝまし

賀茂氏久
我計心のうちにもらしつゝけても人はしらしな物思ひ

平親清女
恋しともいはぬに落る涙をは袖にしられて人を恋らむ

平宣時

打よせむ波こそあらめ神かきに波によせて人にしらるな

権律師実性

波こそはよそにも神にあまるちかひはいつく人にまかさん

家郷恋といふ心をよめる

惟宗光吉

我神の波はなほしも紀鳴てかはるまもなくしもすゝす

寄雲恋を

従三位為信

人まれとむかふるはしれと見えに神につまれる雲と見えしも

藤原為忠朝臣

後撰になかに雲になにかとしてかくての雑も見えまし

津守国夏

もゆる火は人に知られぬおもひこそ雪にけぬよりさきに消えね

藤原信氏

知られしな雪の白山名にぞのこるところでかくて書かは涙に

法性寺入道前関白家歌合に

基俊

よそにのみおもひてつくるこりの末にかくれる恋ならは

待賢門院堀河

雪ふかき谷の氷れはいかてやしまふかみ心といひてしらさん

源清通朝臣

契りしは岩かきふちのいはてのみ流れて人に逢瀬ありとは

弘安百首哥奉りける時

前儒正三位

おく山の岩かき苔ねと流出るやまはにしらまきれん

無常の心を

亀山院御製

知をつや岩もる水のほとりもこゝろの下にせくとは

為氏朝臣

わしもひむすふ岩ねのそことても誰かいはきの山の下水

源兼氏朝臣

住吉の波打岸の草よりもやへ人しれてぬれてはそれ

殷富門院大輔

人しれぬ思ひはさえて色つや波よりまさる二つの浦松

寶治百首哥奉りける時寄木恋

常盤井入道太政大臣

つれなさも朽木の桜老ぬとも一つの花はさく人もかな

題しらす

よみ人しらす

契りやは海もとほるのみすまるさくらみやこはそて

夏の月の秋萩に下葉よかれて人のまことかな

清少納言

逢見んよと云つまもあさまの宿にもはつくさも逢坂

無題よよ海を行幸

太上御製

かすみたつえさくさく安芸のさけ人かと歌はかの

和通しる草はの宮によるねえのまるらしかみて雲に

百ゝ年東里しとき

宰相典侍

摂政太臣

はるよあまの原無人のよわかつ袖の春

前中納言為相

えとふるぬまあるゐの水くまくかるふ人のやと

寄池祝

法皇御製

池水の庭れむすの水くまくくれひくへいと誰かはすむらし

前大納言為家

うきよはわかれねの水かりよくおと人と無日

太上御製

ますらぬ人のめとたゝまよいそて月のまぬ限

正三位為実

かくとよいその杜の木すゑよ春のさかりんの名をとむ

秋の月の法の葉よつけて女のりよつゝしまつ

津守國基

ちはやふるいはせの杜の木のしたの露のなかよりしげき通
為氏卿いはれしと　前中納言為方
やかねのひとつよるにきく人はやそのうきにしめ縄
百首の歌よみし時　律寺圓光
大あらきの皇の杜の中にすきかけてかへし袖の時雨い
弘安百首の歌よみし時
入道二品親王性助
神なびのいはせの杜のいはぬまに袖の時雨とふる人もなし
読人しらず
新陽明門院集作
ちかひりいはまいはせの杜の露さえて口の雫を通し

宮寺菜集にてよみ侍ける
高階宗成朝臣
杉まつ神の霜のさえかはいかにさむしてなを常はくなら
百首の歌よみし時
前関白太政大臣
神垣の三山のさとの神木に杉ありて経たる人もまた
題しらず
前内大臣　通
人はたゞ神の恵やらちのいはせに木の下の山にも
よみ人しらず
ふるまにて祈りにて祈ねとや人をもつらきをしなる家
宝治百首の歌よみし時　宗尊親王

後深草院少将内侍

おひつていきねそ世のことくは神の見るまゝにまかせて世
影しらす

中院右府

頼しる神の瀬よりは浪のよるへはいさゝかもつみねかて

前僧正公朝

ねかふとも遠からし我の神すゝしくかつまて哀れあれ

源兼氏朝臣

人目のみ世上の道はさくはかの下はいはいさとひくなれ

藤原為親朝臣

いかなるさん神はおもまつの海河にさへぬまもよしむすふ契

式部卿親王家にて宮河ならしふると

平時数

人達ぬ心をかまはぬ瀬河神もよしみのつくしもあれ

弘安三年九月廿日内裏にて三首歌講せられ時同心を

権中納言公雄

世をまもるためとつまれさせる瀬の門は神もせしも
影しらす

藤原親泰朝臣

せきもる瀬の門ははやくくもるわたはうちさしまもる白

百首歌よみし時

少将内侍

いかやうにおもひてん我か門をの理よりあるらん様

情今は無きを　弘長元年歌

流れ行く人のこゝろはあさき川よしや濁りに流らふとても

題しらず　　平政村朝臣

ことわりにひく網もたえぬ秋下もえの絶えてやむべき

宝治百首歌たてまつりける時寄網恋

祝部成茂

下もえの思ひを空にあまのすく藻塩の煙たえもやらなし

建長三年九月十三夜十首歌合に同心を

前大納言為家

あまさかんほとは出てし塩屋の根の同じ煙にあまと任せても

恋歌中に

高階宗成朝臣

恋しなん後も名のうきは煙まで人想ひの深き

平維貞

誰かや消えなん後の煙までもたえず思ひのあまるともなき

在原基明

秋ごとにこえて思ふ人ひとりもなし恋の煙もまことにえぞおもは

在原経清朝臣

つらさをも知らで下もえの煙こそ立てゝもまよへ雲に乱れて

藤原為定朝臣

下もえの思ひの煙末終に雲となるらんや空に立つらん

前大納言為世に海をゆるし春日社にたてまつりける

行阿法師妹

和歌の浦におもひくまなく焼火の夕煙かさねて世をわたるらん

内よりまゐるとてあはれとやすくこし行きかへりけり

女御厳子女王

かけ焼煙よそにてあはれ哀なるとつくむ神や恋ひわたらん

為家百首歌奉りける時

僧正行意

立のほる家の海の夕煙たちそふ中にあまりのさゝき

読人しらず

躬恒

人目よりともしはつましき庭野山にもえ火はへたてゝ

西園寺太大臣

庭よりやくともしけんよしなき天津やまみねに詠ぬ世に

天徳四年内裏歌合に恋

中務

ひとしれぬ思ひはかりに我恋ふる人もとおもへは世や

読人しらず

下もえのけふりはいはぬ人をこそおもへはつらき

上東門院

あさくまたいかてもえけむ煙のたつをみても

後二条院位におはしましける時人々に題を
たまはせける中に花といふ事を
贈従三位為子
もろともに見し人もなき春なれや花も昔の色はかはれる
静誉法師
思ふらん程にはあはぬ人もなき世にこそ花はちらずもあらまし
法印良祐
知る人のつきてたのめし夕暮のいさよひにも出ぬ月哉
左京大夫実任
いそての浦の山もとしらぬ事さへもなにはのことゝやすらん
よるへしらす
家にはじめて歌合に神祇の題をよみ侍りける
百首歌よみ侍りし時　従二位宣子
もろこしの雲ゐのそらも神よりもうけてし道の末ならぬかは
嘉元二年内裏歌合に未逢恋
前関白右大臣
いはてしも思ふ世なくは人のかよひちをまちわひて
恋歌中に
平政長
うきにても恋しき人をうらみわひたゞなきての集
正三位為実

朽ぬとも誰かはしらん世にもれてかくれぬ難波や芦の埋木

弘安百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

さのみやは高まの山にゐる雲のよそにのみ立かへるらん

宝治百首歌たてまつりし時寄雲述懐

花山院内大臣

世すてゝも身はうき雲の立そひて[illegible]消やなされん

題しらず

藤原親範女

春日かはあらぬ海の夕暮に何とかうきしむ

弘安百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

世すてゝもこゝろの松は朝夕に立かへりやむ時もなし

述懐中に

前関白家　押小路二条

世をすてし人のおもかけ残りけり

百首歌中に

従二位宣子

誰かいかにうらみん世をうき物と我身しらすは

題しらず

藤原雅朝朝臣

世をうけの心よはさ[illegible]はうきの渡と成らん

後天門院

[illegible]

百首歌奉りし時　　入道前太政大臣

もろこしも浪の外にはいつくまん高麗のみ神よつむらんは

取典を　　上之御製

恵をと尽すまてしききいつまてか変らす高き

三条入道内大臣

いつまても立ならし雲井川くまいまての神風の波

百首歌奉りし時　　入道前太政大臣

君か代の巌の岩波まるしまて打顔くね千代の岩

詠人しらず　　法印静寛

白河の岩打浪の打顔くね神の

権律師兼世

もろともに摂ひし地をよ御山ゆきとりわかのまを変

源兼朝臣

いつまてかよし地つる源の三井の名し尽しとも

菅原清澄

せきわたの秋よりけるて源の秋も月そ知らん

権大納言公奉

ながさりし五十人や雲ゐんまてそて夜の源を

宮山典のめとかきにか

山階入道左大臣

ことによりて出ける人のもとにつかはしける

契後隔恋　　従三位為理

頼こし神もこゝろにまかせすは思ひし契の末もかはらん

家に歌合しける恋　　家入道前関白太政大臣

我恋の夜かれのゝちのまさるらん思ひにまけて逢ふよしもかな

續千載和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　　柿本人丸

秋山の木葉かくれ行水の音さへしらぬ恋もする哉

よみ人しらす

冬は山のはに出る月草のうつりも見えすなりにけるかな

延アに元良親王家歌合に　　源宗于朝臣

人こふる心は空にうき物となりていつまて時雨るらん

恋哥中に　　源信明朝臣

ひとめぬ絶も中ゝまゝしさえにいさきよのかやの秋

崇徳院御製

夏ふかき野中の清水むすひてそとめもまた袖のうへにやとる

ちりよりも秋の月そよそに絶まつ

藤原範永朝臣

清水にもちるやもまた大河のこの中のこと袖にをねまつ

人こそ見すはにこそありけれ

後鳥羽院御製

にほの海の波の浪の中人もはるの風そまつにこそきませ

きしらにす

新撰しのまゝよにかつらの秋かなしのまゝな

弘長内裏百首の歌奉りし時寄水恋

前大納言為氏

かけとめて見しよはおもへはしのはるゝてはきて山の井の水

忍恋を

土御門院御製

涙河下もかよはぬ流れにて末の逢瀬をたのまむ

承元百首の歌奉りし時同心を

入道前太政大臣

あふまてとおもふひとつやと人をへて袖の涙もうきにたえます

ことしらす

藤原範行

世の人はなほあらは涙すそらけくものみえとしほ

郁芳親王

松の葉にかゝる雪とみしほども行時雨は涙なりけり

中務卿宗尊親王

いはれ野の萩の葉に結ぶ涙の露もかゝる袖かな

権少僧都良守

弘安百首歌奉りける時

みしよりは黒田の杉原露も霜もおかぬ袖ぞ

二品法親王覚助

たつた山紅葉の露に涙もおちて秋の袖もしぐれ時雨と

題しらず

永福門院

いまそらに行あふ空の浮雲のうきてたつ名は惜しからずとも

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

定めなき世をもうき身もなしてこそ月の世にすむ身のうへ

百首歌奉りし時

前大納言実教

よし月のかげはくもりもやすらふまことの秋

寄禁中虫といふことを

権中納言為藤

ももしきの九重の内に鳴く虫も聞く人ぞしる秋

弘安百首歌奉りし時

亀山院御製

冨士の嶺の煙の末を詠すてゝもゆるおもひの又離れぬ

千五百番歌合に

宜秋門院丹後

時しらぬ山は不二の根いつとなくこゝろもえぬる立けふりかな

題しらす

大納言經信

いかにせんかはこゝのあやてもつきせぬ憂世の事を

東宮傳師信

塩の焼浦の煙は末までもなひくやいつくひとへぬそらの

清少納言と書かれし絶ぬ小嶋文ありとみえ

権大僧都公順

ゆきてみよすまのうらさひしさに我焼あまの塩の煙と

題しらす

皇后宮亮兼嗣

伊勢の海あまのかるものたくなはのくるしき世には

為氏朝臣女

恋すれはひくらしつゝ煙の末もしらぬそのけふりかな

荒木田季宗

いつまてかあふせの浦の波の上に人をまつらん我身

平通時

をのかはなはよるなみのうへを見渡すそらのけふりそや

藤原資明

我袖よ海士の涙しほれ[illegible]ぬるゝの浪かくるらん

名所百首奉りける時

正二位知家

松嶋やをしまの海士にこととはん人まてくるゝ袖の色やかはると

題しらす

前参議忠定

松嶋やをしまの海士の衣手も夜さへほさてぬれて袖のかな

弘安百首哥奉りける時

大蔵卿隆博

[illegible]うきねの浦よりも涙にまさる袖よりも人[illegible]

恋哥中に

前参議雅有

あま衣ぬれてそ袖のうらにたつ浪よりも猶しほれつゝ

題しらす

為氏朝臣

紅をやしほはそめて紅葉にほさぬ袖の紅葉とも

藤原師光

よそにみるうきねの浦のあま人や猶涙に袖ぬらすらん

法印公恵

何とかんしほたれて海士のこころもぬれにけるかな

祝部成久

我恋は志賀の浦風ほすまもなみたにぬれて袖ぬらすらん

百首歌よみ侍りし時　関白内大臣

このころやいかにかはらん一夜の浦人みるらん袖ぬれしとき

題しらす　従三位親子

朽ねたゝ袖のうらなみかけしよりくちぬ人めもあはれなりけり

二品法親王覚助

涙河流るゝ中の瀬ともなりてうき名をのみやさらにたてけん

永福門院小兵衛督

逢ふ事の中に人めの関守はなかのうきなのこゝろなりけり

尊歎法師

難波江やあしまよりくるあまのことゝはてはゆかぬさはりなりけり

嘉元百首歌奉りし時　権中納言公雄

難波えや思ひしあまと漕出しきみかさそはれぬるや人

百首歌召されし時　法皇御製

わたのはら遠けき浪にをさしこえぬとかねて思へはる

二品法親王覚助

とのつかふ針のうきみなるより家の命とかけてこそまて

前太政大臣

年まてと誰故か身をし命とてかけしと人のつれなき

恋歌中に　平宣時朝臣

ゑこそは老となる命もしらぬのちこそありけれ

民部卿実教

逢ふてのちもつきのかくれすみてけふまてにあふそうれし

権中納言実兼

ながらへて命のほどははかなけれども末をさてはちぎりやはする

百首歌奉りし時

昭訓門院春日

またて世にあふ人そなき此のつる人の代をかきはかゝるまて

宝治百首歌奉りし時寄橋恋

従三位為継

長らへは命をまちてかれせて何まてかはと渡らん

題しらず

祝部忠成

なかつよにあひまての月日まて語りしものゝわするゝは

源俊定朝臣

いのちやは人のつきぬ年月をしらぬ命のほとにまかすへき

文永二年九月十三夜亀山殿にて五首歌合に

月祝

常光園入道前関白左大臣

ちとせふる計のかくこゝにやとりてつきまうさかと歎かな

前大納言為氏

世にしらぬ命のほとのつきぬとて猶ちきらぬ田世そ変

平宗宣朝臣女

住吉廿首歌に

日へと　　法印定為

たのむへき命よ恋の根にてあらは逢坂の末も難くは
頼しらす　　法印長舜

忘年そこひて恋る年を重ねきてけれともは逢
いつまてか恨むとけふをかさね衣重ねて年をへぬらん　　[illegible]
年月のつもるも何か惜まれん人の心のつらさならは　　藤原為躬
つれなさき人の心は憂き物と知りそめてよりぞ恋ふらん　　贈従三位為子

あらましの憂きよ年ふる物ならはつれなき人を恨みまし　　前権僧正雅[illegible]
逢ことはこの世の外の真葛原根もなき恋を恨みてそへて　　大中臣為[illegible]
かはる心もさては重なりは憂きよや人の心なるらん　　藤原秀長
こしかたの命ありける末を思へは行もなかへやなをも　　権少僧都浄道
憂世と契ることはかはりけり逢ふにはかへぬ命なりける　　法眼宗承

中務卿宗尊親王家歌合に
　　　　　　道法法師
あひみてもなくさまはいのちの長き後のちきりまつ人のうき
思ふ中なり
　　　　　　法眼兼誉
逢まてと思ふ命のをしつゝもなほ思ひて命をそ惜まれ
　　　　　　津守国平
思ひしらん命のはてとつれなき人の為なりけれは
　　　　　　藤原為隆朝臣
恋しなは我故とてもおもふまてつれなき人の心なりけり
後光明峯寺摂政家のうた合に久恋
　　　　　　源親長朝臣
つれなさをなけかん人のあらぬ命ともさてそおもひしりぬるに逢
思ふ中なり
　　　　　　権大納言実衡
命こそつれなかりけれ逢ひ見すはこのつれなさにうき世をそ
今日我よにてはかなくそある
　　　　　　前大納言為世
命をは後にたのまてつれなさのつらき限をいきてこそみめ
嘉元百首歌奉し時不逢恋
つれなからんまてつれなくて逢ことゝ命とゝもに人の心は
百首歌奉し時
　　　　　　六條内大臣

いつまでも但馬命といきまうへんといひていさらん

題しらす　後二條院御製

惜しまん命のきはは逢ことのいふかひなきとはゝきや

從二位家隆

とのつくる世にもかはりはてぬ人の命ぞ思ふ

弘長百首歌奉りける時寄述懐

衣笠内大臣

いそぐらん道の時によりてかくはへてまちえん

述懐の中に

前太政大臣公賢

うきなからして猶も世をへるかな緒つまるをさむ

平宣時朝臣

なほ世のむくひとはいそて知らましきて人のうへにむくひぬるかな

百首歌奉りし時　前参議為定朝臣

世をすてゝ後につきむくひ果てぬ世をまちきかん

題しらす　中務

西にふくる後の夜月をこそもつき思ひけ世のうれは

嘉元百首歌奉りし時寄述懐

贈從三位為子

何故に同じ世にてはめくりきて契りもをしつもるらん

百首歌奉りし時　法守国會

いつくにもさてもかはらぬや猶よそにまなせん

権中納言為藤

ねなくぬかとそきて中々ゆきまかひ(ふ)にもれて

寄年恋といふことを

前大納言為氏

柳葉に神の中に(わ)けさらに雨さえと云空へ
花しらす

永福門院周防

よそよりのこの神杉いる逢ても我まの無常らん

二品親王家五十首うた

前大納言為世

逢こと人といまて我おもひすみのや神といふらん

祈空恋といへることを

皇后宮大

祈りきやる人の心もみのことして我契のしるしけれ

祈経年恋といふことをよませ給ける

法皇御製

こゝろ川良年々ののくれなきのふ物を神のしるしむ

恋哥中に

正三位為実

流くの世とたのみすゝき無河むかしの時にあとそふて

中臣祐世

あらねともすてゝひとり水の末も世の乱にすみ侍は

平時見

いにしへの淵は瀬となりにしをもかはらぬ中河の水

法守国助女

猶ふかき昔の里川はわかるゝさへ人の歌とさまみ

宝治百首歌たてまつりし時寄歌述懐

前大納言為氏

わすれしよ明くれの跡もまつ里の中河の紅葉

題しらす

承覚法親王

ふる雪のつもりて世をてらしへやまさらぬ心ひとつ人そまちける

曽祢好忠

ふるさとのやとにわかるゝかくれ家もさはらぬ垣ねとそなりにし

中務卿宗尊親王

数ならぬ身はのゝさはに立鳥のあとては何事をか侍
言ふともよし山鳥の尾のすゝ続きていふ山鳥のかけさへそなく

弘安百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

今こゝは花山鳥の同世とさかくて言のはそへて

建保六年八月庚申に人丸とよみ侍ける

後久我太政大臣

かくてしも世をやつさまん山里のおくり衣をかさねてぞを
世の心よは海を行まつ

亀山院御製

海山のうてても出らしとしは義ひとくいつらやまし

盛明親王

みつしほのかはのあさ家の山ここまてをにてみえつまれ

源兼康朝臣

桐坂やうは八人をはしもみをゆかさぬ中元人のうへに置

前大僧正道玄

いそのかみふるの高橋なほふりて夏のとく出日とらるゝ

院御製

夏中にあすの哭も白むのとうえの橋にはやもしやし

家にて千首よみ侍し時

二品法親王覚助

いまをも夏次の浣河を元もってはなをやすくてあれは
花しらす

永福門院少将

浅りえ夜浣の河のはにやうもあやうにみえて気色

中臣祐春

昨日浣の河水にとつて夕暮まちしも袖をぬらさん

津守國平

秋深しや吉野の川とみるはいもせの山の影やうつると
いはまには菊の花の名所川面に色せしとよそにまかふらん
大江匡房
平行氏
色せねはき間にそめてそまはれぬ秋の浪をうつろふも
紀俊文
何事もなき秋の色なき菊もつきをかへし夜に月のかけや
中臣祐親
色にうつる菊は光りのかけそなき秋の浪にしまう
従二位経尹
霜ねの菊の通路かけてはなれぬ秋の人の心のなこりかな
前大納言為氏
色をはうつしそめてのつきさえて秋の夜のしら菊さかな
前参議雅有
さすかに又いろやかはらむ一重まさる人の菊のまつらしなほ
鴨祐治
つとめて初霜にまさる秋をは人の菊のみえまさる
高階成兼
霜ねの枕にかへて仲は菊をうつしてもかはる色なきかな
中原時実

ふるさとも猶やそのまゝ咲ぬらん萩を規のやとゝさためかねつゝ
よみ人しらす
はらからもみこけれ共ねようら秋の萩れ根計を
なほしの萩えかすへくおほ坂の関をこえての下にてなりなる
正暦四年五月帯刀陣歌合に
をとこの萩計をまちて海ハくてに抱ハ見えさらまし
読しらす　是則
秋の秋をまちてのみすこハ萩をちらす露まさりけり
寛治八年従二位親子の家歌合に
権大納言公実

秋をまちかねてまちてをあまた過つる契人も無世に
秋歌に　院御製
夕月の果み行く人ハくもらぬさまハ月ハまつるをと啼れ
嘉元百首歌奉りし時　不知作者
升ねはおもひて萩のさきにさ荻の上すつ道て
前大納言為房
百首歌奉りし時　法印定為
とはさきて升るよ萩の上に抜うさ契まへの露
恋歌中に　後深草院弁内侍
まちての命にも契つよし萩にもえしてもえやハ思ひん

贈従三位為子

定なき命もいつまでまたん哀しき末をこのむかしならは

法印下房観

なをさりにたのみしことを命まていけらは計の心やむらん

平宗宣朝臣

惜まし命もたえぬ世中に人の哀は海とたにやまとも

中務卿恒明親王家按察

行末の哀もしらてつくゐの命ならねも

後二条院位にわかれまいらせける時人にかはりて

百首中に行末と哀恋といふことを

贈従三位為子

命あらはなほそまさらんもまさりなん思ひ出よ

題しらす

前大納言師重

哀しと偲ひしまゝの年月に海のかよひをとゝめらるらん

ことよみこの文にや偲ひける時めくらす会に哀恋

従三位為理

偲ひねなくさぬ袖の色をかはらんまてはおもひこそせめ

ことよは製

よのつねの哀のまゝはいつまての命をたのむ

續千載和歌集巻第十三

恋哥三

題しらす　　順徳院御製

偽のなき世なりせはいかはかりかきてとたのむ言の葉の定

亀山院御製

来ぬときく秋の夕暮と契しをまたまたぬ人もなし

嘉元々年百首哥奉し時絶恋　　前大納言為世

難しかる人のこゝろにうつりにき思へは絶てさそはれん

恋哥中に　　太政大臣

まことにもやすかねたにまもしらん偽を世にあまり頼む

百首哥奉し時　　入道前太政大臣

人心かはるはかりそうきよとや末の世まてそたのみこし

題しらす　　前大納言師重

契をきし偽とこそ思ひしか人の末まてかはりしまつ

権少僧都能信

おもへとそかへるもつらきねてまちし偽とおもひそさそせん

法印行深

偽と思ふものから言の葉にかゝるはかなの命なりけり

平貞時朝臣

契しも松のまれときかりとふくあらしかな

平宣時朝臣

秋よなほやまとは秋風の身にそしみぬる夕暮もなし

権律師慶世

秋をあはれ夕暮とてはこひしきや人まちえしひの荻の上風

弘安百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

冬まちかくいろなき野辺を山松に風のさそひてまつさえ

前大納言為世

たのめこしたか夕暮の契りをかはりふかきあらん

前大納言為世よませ侍りし日吉社百首歌の中に

法印宗源

さそはれて侍るまこそあはれなれむらさめのをか

題しらず

右兵衛督藤長

たのめてもこぬ人まつの夕暮は身をとてもへたつるあはれ

前大納言経長女

侍ともおもひはてぬのこれ夕暮のそら

法眼源承

我思の物とてもなき夕暮の空たれかしらまし

嘉元百首歌たてまつりし時

法守国名

山のはのつきもむかしにかはらすは御代の松のみとりそひさしき

永仁二年八月十五夜十首歌よみ侍りし時月前松

契逢といふこころを

為氏朝臣

いはしみつ月のさかりは秋ことに契し秋をそへてすめは

永仁元年八月十五夜亀山院にて十五首歌よみ侍る時秋祝

法守国助

作のまゝにかはらん今すて万代まての月のひかりそ

影しらす

宰相典侍

神をたのむ心の松のみとりも月のひかりそ

大江政国女

たのむと思ひしかひもなくて山のはの月

三位長衛朝臣

神ちはかはる神ちにすむ月の影

前中納言資名

そのかみいつのまにか思ひを人しらん

後二条院位にありてまたしきを

人々よみ侍りし二十首中に

納殿によみ侍るを

贈従三位為子

よつのうみも出はらはり浪の都をいてたらん

题しらす 前太宰大弐俊兼

きよくすむ深ぬるまてもさやかなん雲井の月の桂の影を

藤原景綱

ほとなく独詠て深にけり桂の影しきぬいさよひの月

平宣時朝臣

絶えすみん雲の秋ともよるこそまさや秋の月をこそ待

前大僧正実超

おのつからくもりなき月影を深ぬるまて秋むる

前大僧正仁澄

月のさかりすきし桂の霜りもへして秋も人も空さへのかく

後二条院御製

ことのはねさめし月と詠てもうき身にそ深くなるらむ

伏見院御製

せめてさは侘とそ思ふや心なくて心ある秋はのつきと

今上御製

宮縁とつ秋の露とやきさめらん園てらす月同し桂は

嘉元百首歌奉りし時

前大納言為世

かへても猶まく堀河院百首歌たてまつりけるのちかき

題しらず　修理大夫顕康[?]

夫[?]こすゑ雁とこそ思へかし夜松吹風に秋は深山[?]

山吹をおりて人のとこさりけれて

中納言家持

竜田川と秋くとにわかすは中しもの葉にさはりまよ[?]

秋とすゑ人をまちらひく

右近大将[?]母

なきやつねとものうきねさはいかにせてよたへぬわれん

題しらず

中良[?]

さのめて綿[?]秋風しきりてねぬとてやきのわ侍ん

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

しほひのてつきなきにほねきも綿[?]とりにいってをきも

秋田守る賤がかりほのいなむしろいなてて秋は床は露けき

題しらず　紀淑[?]氏朝臣

さひしさのなかにたえしもの露とおきぬる袖のうへかな

宝治百首歌たてまつりし時寄[?]夜恋

土御門院小宰相

うちさやぐ浪よる袖にしほたれて思ひもえぬる身とは

恋すとてよ海を行きつゝ

後二条院御製

後れ遣てしたふ心のさそはれて涙とゝまらし秋の暮

昭訓門院権大納言

かゝる悔も契もあらし明まてよそに待人をとふけふのかな

藤原泰宗

まちかねて打ぬる宵の新枕よそにも秋の夜やなかるらむ

よその人しらず

うらみても猶一夜の新枕夢計にて明けるとも

思ひ出にせよ人こそしらね

為明朝臣

とはるへかりし人目つゝみの中絶てまたあふまての涙なからは

嘉元百首歌に寄関恋

入道前太政大臣

越えても後にこそ人の思ひ出で逢坂の月よ雲るなよ

初遇恋

前大納言為世

逢ふまでと惜しし命もかしまはさて逢ふよりぞ久しき命なりけり

弘安二年亀山殿十首歌に稀逢恋

光俊朝臣

はかなくも夢かと見えし夢なれは現にまたくるやなからん

恋歌中に

大江貞重

いかさまに今てふ菊とうつりまて色まさりゆく秋の霜

かり初のしも秋津の露ならて久しきまての契りなれ

法印玄益

前大僧正寛超

今よりも老のさかゆく菊もかはらしへかはらぬ菊乃にほひは

權大納言兼季

思ひつゝ時のまゝ色そへてつきもせぬ菊よろつ世ぬ

源光忠朝臣

深くなほたのむとさりのつきせぬまゝての根さしなれ

左京大夫實任

と秋もまた行末の色とししらぬ幾千代に契らん

三善康衡朝臣

色くさもかはるものやと思ひまさりそふきぬ

光俊朝臣

こきぬくにいつまてか秋くれて菊の色

色とところて待ちし人のこゝろに思ひ色そ

源具行朝臣

菊の花夏もそめてさしくも御代と結ひ放ちけん

色にしらす

從三位親子

中くに宿しきこれも菊植て深く色ある秋の色なれ

民部卿宣教

さてもなほといひしく人の心よりもまつ虫の秋に

前大納言家雅

まつ人の心いかにとくらふらんとよまつ虫の音に聞けり

法印公恵

ゆふよゆぬと鳴るにつけても見えて草ふかきなもすゝきは

二品法親王家五十首歌よみ侍し

前僧正道性

さらひ侘てくはなくひのおもひよわかる虫の音もかきん

百首歌奉りし時

少将内侍

ゆぬともつけらてきおもひとよる虫の音にまされかん

今上御製

人を待わひる人はおもふ心もうらみても哀まされ

章義門院

りまの涼しき夜まさりやさてかなしきかれてなくもかな

春宮権大夫兼忠

おやまくにさてもや人のやまとも見えてさりやつきおもと

寂恵法師

さてまた人しとらぬ別しの秋のよつゆ暁の空

祝部成久

きえて行秋の空は雲まし色ときりのなかりせハ
まほしきやみひとつまし月こしのかくぬなかりせハ

藤原秀長

猶またはあけぬる月をはなれぬの山のはつきさゝ遅

藤原基祐

よみ人しらす

なかめのはてそいつれ月のこるさき秋の雨

源貞康

明ぬるまては行やさしきの曇るまゝ中の月のなさけハ

藤原宗秀

くまもなき夜はいかにかむかしの秋をさそはむあけかた月

月こそ清けしあかぬおもひの袖とおなしよそに涙なり

藤原宗行

なかむる夜をあかす時

大蔵卿隆博

別ちかき夜はさそいかて世に又有明の月やさそはん

題しらす

前大納言通顕

夏かとみえしは雲なりけることしや有明の月

章義門院

有明の月をうしやいつる月はいたくもかなしきかな

法皇御製

さぬくの袖の湊よ那らまく鳴とせゆる明月
能ぼりとさらく浪るよ合せ遠し時に無の
へだてよ海を行ける

ころもよ是や涙と出しきらし月の袖まれも明月

暁更送人といふことを　上皇御製

送くる暁を別をやりてわらしの涙よりう見明月

嘉元百首歌奉りし時暁に逢

前関白太政大臣

おきてゆく涙くもりぬ月をかは袖よりも先の歎は人まし

百首歌奉りし時　前関白左大臣　押小路

ちのうちに立ねまでは我がむねく月あかの名は

正安四年六月あらたなる百首の名を去ことを海
を祈りける　後二条院御製

関守は暁計村にねまよ秋通路よ出んらかれり

百首歌奉りし時　内大臣

ゆまめてそいかく露あるの村をぞ立らる海にて

暁の中に　前大僧正救定

心からつく我袖よりもつらんらりね身のこれもの露

宝治百首歌よ進りける時　実原逢

後陽成院御製

このねぬる夜のまにかけさはおきつはつ瀬山
山のはにかゝりてつたふしきまつ

左近大将朝光

音よのこゑしもさてもなくさまるとは郭公杜の宿けり

百千鳥時　　入道前太政大臣

涙とこそしも出てまさるなみの郭公の宿まちかね
郭公しらす　　　実兼久世

なくかなき花の節にはまらふるかたを郭公つをきま
山のかとよ海かりてわかまつとてきまつ

参議定経

おきふしの花のまにまに郭公やつて宿けるかな
かし　　ましらす

此やまあさきか若紫にまはれる郭公の心を

後朝恋の心を　　游義門院

なかの声よ思ふつきぬくの涙そへぬる郭公の宿

永福門院

ふくさまく郭公をきなの声とひとりなかぬの宿の時

百千鳥時　　二品法親王覚助

とはとてそのつきぬくすなかの音をきくちかれた

釣恋と　　大蔵卿隆博

こゝやまとさ夏の夜のなかきへと朝の秋もの心か
人をまちつゝくれはつるかな

祭主輔親

けふまてもえこそしのはれいかて色しく黄葉まさん
見しかす

素性法師

ひとつゝ海よりこそ浪のなかにも袖のひる時なき
家ありし百ありなき時恋と

光明峯寺入道前摂政左大臣

よ海の蜑の塩焼衣よそにのみ[illegible]袖の浪

恋歌中に

前大納言俊光女

いなさらんうき中川の瀬をせよしすく契のかたも後は
名残百ありなきまゝ時

皇太后宮大夫俊成女

ふるのゝますかの池にうきねなは[illegible]
今はよるへ人わりとこけの人につらきかな

和泉式部

天河かよりしかよはなかりせはや井のまに[illegible]

帰恋の心を

源兼氏朝臣

よそ人をも待ちし天河同し逢せよりこそ[illegible]

弘安七年九月九日ころ内裏へまゐらせし
寄菊祝といふことを
後光関白前右大臣
しるらん人の心も白菊のうつろはぬ色をなほよにあせらん
前大納言為世
あまたゝひ霜をかさねて白菊は霜もうつろふ秋の契は
頼しき哉
津守国道
秋よりのこゝろも月草のうすき色につゆそまん
法印長舜
わすれめやこゝろふかめのつけまては人の心に花はよまし

権中納言公雄
頼つゝかけても猶そのまもるらし濱名の浪の濱さゆれは とり
弘安百首歌奉りし時
前参議能清
万人も秋のよゝにかさねつゝ人の契とえやはたのまん
人の續ぬうらみかさねつゝ
藤原宗秀
神代よりいつまて續く人の道つたへて
頼しかりけり
藤原則行
月を見る秋の夜なかきあつさのしれぬ心も

藤原家泰

かけとはいのらましかみしめ縄かけぬつゝの神にまかせて
宰相朝臣伊勢へ下向のとき斎宮へ
御まへの女房のもとより

よみ人しらず

ちはやふる神のいかきもこえぬへし大宮人のまくにさはらは

返し

宰相朝臣

ゆくかたはしらすやちはやふる神のいかきにたちよらは
月をまつよにまもりとそ女のいひおこせたりけれは

中納言為藤

うきやよにかへてきぬらん久方の月へにかくも覚えさらまし
猿恐よ海を行まて

土御門院御製

おくりてかへるに出たちて見しかはこの月

百首歌奉し時

左大臣

月見もる雲の影もかはらぬを名もとゞめぬる源氏の君

正和二年九月五日十三夜にて内大臣にて徐猿恐

上御製

しきしまやむかしのまゝにいはぬ名もしのふ昔の空
恐の世よ海を行まて

後鳥羽院御製

なれをね鴨の上毛の霜おきわひつゝ袖さへ冬や

百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

難波女のかれあしのやの庵一夜のほとも恋やわたらん

二夜路へてをる也とはなしとよる

中臣祐春

明石潟海の小舟さへ漕てあすはなほ逢坂を又越なん

題しらす　藤原行朝

おもひつゝのふにも夢の逢ふとこねよかしまにもやゆくらん

法印実雲

あまのかるみるめと海の晴まてにね覚する袖の月影

丹波忠守朝臣

こよひの袖に涙はなけれともてふね秋はつきぬ月の影

順義法師

従ゆく海に果ひとりもり月さへ人の契をあすはしらく

藤原基任

行よみね神も逢坂の月のかけ海の岸にのこるらん

百首歌奉りし時　権中納言為藤

従三つらなきまつ浦みをもとりもあらは海に

ものしらて逢坂へとひへてとくこえん

御返し

権中納言親房

つたへきて跡もかはらぬならひての神代の道を

宝治元年十二月会に遇恋

前大納言為氏

まちよはる現はいつもよるの夢にまさるやみもこそあれ

同心を

前大納言為世

うけえたくの跡にかひあるねざめの夢の契なりけり

題不知

藤原基任

なくはさやとらんかたにの人の心とこそ夢もなれ

元亨百首歌奉りし時逢不会恋

従三位為信

人の心いかにかはりて通ひけん又いつかはの空も

権中納言公雄

人はよし今はたゝ忘れしもその夢を夢と見しはよらぬ

前摂政左大臣

住吉社によみて奉りける百首歌の中に

はかなしやまことのなき夢にも中々いかにつゝむはうき名

前大納言忠良

ともすれば思ひしられし秋の夜のその月影の思ひにはよそに御覧

和泉式部

あかずして[illegible]有明の月に見えけんとはまし

続千載和歌集巻第十四

恋哥四

題しらず　　坂上是則

秋山に鳴立鹿のこゑたてゝ[illegible]
[illegible]

九条右大臣

秋萩の下葉に通ひし床の上も[illegible]

逢不逢恋のこゝろをよみ侍りける時

前中納言定家

かりそめに逢ひみし里の秋風に我身うつろふの床は[illegible]

無名中より　　殷富門院大輔
地上濡るゝとこそ露に秋の袖とおもひし袖かな
前大納言為氏
さゝとふくに出し秋の田かりほかくしはらふ花
文治百首歌合に　　二条院讃岐
いそのかみふるのわさ田につくるく人わくらむ秋は
遍ふ亡野とふとも
光明峯寺入道前摂政左大臣
たのめきしこの葉ことに霜ふりてまつ宵ほと時雨
同院摂政家の百首歌に同心を

皇太后宮大夫俊成女
蓮ちるもつもりし袖にそふくなかれの霜の下草
家に十首歌よみ侍りし時秋歌
二品法親王道助
ふるまてしぬの袖はきゆくをくしなかれの[illegible]
題しらず
前中納言定家
夕されは人のいほの袖はつれて秋の霜にとくらん
九条太政大臣女
霜をきてまたきえかたき袖の露も人いつまてか夜のまくら
皇后宮内侍

かへすゝゝ思ひて見よやことしの山もとしつの枝にかゝれる

嘉元百首歌奉りし時よみ侍

前大僧正道玄

秋しはしくれてこの衣たへてうつ袖まれ白露

題しらす

権僧正慈仙

ねやちかく聞えてひまなくうつなる衣のたよりに夜半のゝなかの空

大江広房

衣の葉のいろかはる秋の時雨には我すむ里の袖もぬれなむ

源親教朝臣

月草のうつる夜ころの袖の露もちりそふ里のあはれなりけん

左衛門督公敏

うつ人の心の秋のあはれもしらせてそ衣の葉そうつる

正安三年九月十三日仙洞にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時擣衣

左大臣

月の秋をかへる夜さむの衣うつ夜さむの露も身にしむなるらん

題しらす

よろつ人やもこえ

夜寒けし情もこまやかにうつ衣中の砧の声たえすも

平親清

従ひつゝうき

物ことにわかすみなれしかり衣かさねし袖のなみたの露

なし
　　本院侍従
ほとゝもそこゑこけりさゆうすもかひこえてねまさい
　旅宿中行　　在原雅朝臣
立かへりまた袖ぬらすなかれきてまたかるにも哭は白浪
　　右衛門督教定
夏ころもしたひらくさの涼風に打はらふ袖とみん夏や
　　平時元
知まほしき雲のうかれまつりすみに打下もの夜な夜なに
　　前権僧正公雅
人のわきかぬ哉のことつてかはるしもとひやるらん

　　正三位経朝
夏ころもたちは影のゝはなのにほひあまの川手
　　従三位宣子
いまそん家中川の水に涼を袖にゆふかせのかへさと
　　観意法師
流てと契し末のいつまてか見しまかはる中川の名
　　唯教法師
あひ見ても人の心のかはるよをかなしみ袖ぬれて中河の水
　　大江貞重
いまやかくまちとるそのやまとまちかね川瀬をや人のゆくらん

前権僧正[illegible]
夜更の秋しほの息かくもみえてうき浪

平重時朝臣
ぬるよりおちの海原のうきねしてしらぬ旅路の果なし

参議雅経
ふきしほの夏よりもあきのねのこゑの響も打やまぬらん

平宗宣朝臣
三笠よみの山のねをもきかぬまに時をまたせる

丹波経長朝臣
いまはてのよきあらんやりひとのことをまつ夜なかな

嘉元百首歌奉りし時 歳暮

前関白太政大臣
かそへてもあまりある年はつもりてもあはれなるは
哀しらす

源宗氏
ふりつもる雪を見るにも年をふるひとのこゝろのうちもあはれなり

百首歌奉りし時

前参議雅孝
よのつねのかなしさにも年を経てなほつもりぬる哀しらす

題不知

前大納言通顕
年をへてあはれとききし人もなくかはるこのよそとしのくれかな

よみ人しらす

ふゆかれの通路はしらくこゝろの関守もなし
太宰権帥為経
せく袖の外さへかゝる涙かなさもあらぬ人の関よ
女二宮治部卿
濃くのみこゝろにしまをて関のなのとかめかゝるらむ
津守国助
いつゝ又松風のこゑかよふ袖ぬらしよのゝ篠原
宝治百首に関路風を
花山院内大臣
この葉にかりあはとふるしよそに聞夜の関松風そ吹

題しらず
前参議実俊
またくも程なき夜あふさえねとつらき関守よ
権中納言実家
あひ見ても人の別路やまたあふさかの関越て
ゑしく音つまときく人のはまつつゆまる
中納言定頼
池水のひさしくねややふかんせきこそいつかかん
題しらず
源邦長朝臣
山の井の流さへ見るも都しもかけてまての関之谷
為氏朝臣

河原よ袖ぬらさん人ハあさ沢ま(?)れいひさえなく

安嘉門院甲斐

絶ぬ人の契よいかに乃野中れ水にむすひしさえ

二品法親王家の五十首歌よ旅橋

前大納言為世

絶まさて渡けの橋とら世川さて切水とえしみまし

求ろ歌奉りし時

権中納言為藤

河毎の三おさられわたつさて絶ええし渡もかひられて

宝治百首歌奉りし時寄橋恋

冷泉右大臣

かつらきや久米の岩橋中えくかよふ人の契とをる

恋歌中に

源兼氏朝臣

恋わたる心やえさらん久米路の橋れよるの契ハ

式部卿久明親王

逢ことはよそえの橋れたし程久しくわたりぬるかな

権大納言冬教

恋すよ我とそよ渡の形ちまてうきしかも無んと

禅心法師

しら波よ立つ中れいろなんつきまもこえ渡りける

源義行

かく計ならへとおもはね誰につらさをさてもうらみん

永仁二年亀山院に五十首歌たてまつりける時

津守国助

命をもたのみて中々まちえぬと思へば人はいふ覧こいしなず

前内大臣 云

ありしこそ此世計と契しを又逢までもあらぬ命よ

永福門院

同世とこのむくいはあらねば光まちてし契ぞ長かる

権大納言兼季

逢見ん後とこの身は此世こそ見しかまでの契なりけれ

嘉元内裏二十首歌に

前関白太政大臣

こえなんと頼ひし末の命さへまち侘ぬまで人ぞ絶ぬる

恋歌中に

平貞俊

まてることに暁よりもまさるといはても人のうらみかれん

平宣時朝臣

ことはやよそよの空の暁も同しきよりこそあはれなれ

前内大臣 云

あまりにひとりまよひし鳥の音を独きゝても猶悲しかり

宝治百首歌奉りける時寄鏡恋

従二位行家

山鳥の初尾にかけてますかゞみうつらぬ人の影も見えまし

題しらず

二条院讃岐

とこよまでうすき契の新枕年にこゝぞ世と絶えもはてなん

右近大将久経母

おもひ寝の床のさむしろにうちけち数まさりしを思ふ

平泰氏

とはゞや絶えてもひとつ人をと着はてゝ

法印棟国

とにかくにつらき心のまゝに契りぬるも

藤原貞忠

こはくて何とて人を恨みんと心えていふの葉もなし

藤原宗行

夜河の千川の涼風に中ぞと

為氏朝臣

こぬまでもひとつとぞ思ひて枕の偽もなし

後二条院御製

あまくだる一夜二夜のつきてども

中宮

とのつゝ出やとてのむかしてきつかくはたゞしかと
嘉元百首歌よ進じける歌
万秋門院
いつまでし侍ぬきかへりはぬるとこおもふとおもさぬはて
読人しらず
僧正覚然
かゝりける月みてあかぬ侍よいつまで雲の立へだてなん
弘安百首歌奉る時
前大納言為氏
侍のうちぬくり歌よて絹まくりの山の夕暮月
延文中行
大蔵卿隆博

まつまよ絹出しよの侍まきつまよ出てき山のは月
順徳院御製
雲よみよ絹まひしま晴のかきあとぬかりまかる
月も松らし侍やかつらん事かけて袖の露よ
信実朝臣
草まてとき行ぬ拵きの月影と霜ふと涙よ袖やあらん
永仁二年八月十五夜十首歌講ぜし時
月前述懐といふことを
大蔵卿隆博
月とよそに世の影と出して世の末をみつともみて

為氏朝臣

よそにてもまちしよの待もむかしよりなほ秋ふかき夜の月
影しらず

新院弁内侍

ありあけの月をも秋の形見にて人にみせてもとめ出しよ

太政大臣

久かたの月のこれかけもや秋のゆふくれてらん

参議公明

さすがにぞ猶秋そわびぬありあけの月はむかしの影もかはりて

前参議雅有

よのつねにみるやいつはりうき人の空てまよ秋その月影

法眼行済

いつはれてよひの秋の待よ月を涙にやとさるらん

義象法師

ふるさとしは秋の夜のねさめ月まちて涙よりすみまさる

嘉元百首歌奉りし時

権大納言経継

今もみも出し空よりまつ里の尾の月
さいしらず

広義門院

尾花の月こそ見るかたねと都人のいはけなき

基俊

名残の月とまつには出しとそ夜の秋にはさかりなりけり

藤原為継朝臣

かけりまさりてすみし名残の月も形見とて秋そなきぬる

土出河院上来

思ひつる名残の月もかくれてくもりし中ハ形見にそ通

藤原泰宗

なかむれは詠し秋の月計待のこる影ことになる

平泰時

こよひやへちよくへ逢八月の一つそし中なのこる侍

従三位親子

憂人の行末遠し神のよゝ月をわすれしとてやたえん

弘安内裏百首哥奉りし時寄月慈

前大納言良教

なかめこし形見の月を今よりハ残る秋には影やみえん

述懐中に

津守国助

いたつらに年のまに月のなかめつゝみの老となりける

従二位行家

ひとり見る涙にくもる月影を誰とさやかに人のみるらむ

よきまくよ夏のさとも猶くもりなき空にかゝる軒の松

弘安百首哥奉りし時

前大僧正慈弁

かくしきの神代にぬれてく遠よりの菊ハみてしも庭を

題しらす　　平貞資

姉よりし菊の瑛も折よそりね我見やへ人のつきかれん

中原師香

みる人も瑛んこそをかくつめ尽よとこそも菊のおきせや

平行氏

金菊よつきを折やことへつらん笑さまうつか霜にへとく

宝治百首哥奉りし時寄菊述懐

前中納言為相

むさしのもわかまし秋をとかりよの瑛へとこの菊をこうまい

照云中よ　　と出河流と来

久方のわかて笑みし菊の花うつりわかるゝ年ふる人の仰

中務

いつまてこし秋の夢とうてたつわかいをぬ瑛なるらん

百首哥奉りし時　　太政大臣

秋のことごと云わそてすらまこさますさね菊のしつるらいは

題しらす　　前参議家親

とそて菊とさき折ろ海まてろ露しもをてかへん

弘安百首哥たてまつりし時

亀山院御製

かはらしな世はうつるともむすひてし言葉ゆるさぬ人の傍
跡ありとてもまもる道かな

正三位為実

言の葉も又重ねてやつたへまし家の風しもなをそよそへて世に

従二位成良(?)

とかへりてやまと歌の傍もいつの言葉の道をかはらん

源重之女

わかれにし言の葉さへも常にまたけふしもかはる人のよの道

平貞文家哥合によみ侍りし

貫之

わすれくさ人を言葉にみえくらまさへ下葉の海

よみしらす

友則

立かへり見てこそゆかめそのふるさとのかたみにも恋こそまされ

業平朝臣

年ふれとことそへてまつことはいまもふる人もなくかなしき人を恋しかるらん

宗于朝臣

年月をしらてよあかすかぬ道を過てきていさゝかりけり

後深草院少将内侍

ミて逢瀬ハつらき年月をいかなる中のうらみとてかむ

藤原為明朝臣

来まし恋のこゝろ年月よそてぬ恨のつきぬしかり

遇不会恋を

院御製

一夜まに恋そめてしと思ひよりつらき年月の積りけり

恋歌とてよませ給ける

亀山院御製

年月のかねつきさよさきのこても我ぞけふ袖のうら波

続千載和歌集巻第十五

恋歌五

ひとりねてなけくまりきつ人

平兼盛

待人のミゆる来ぬ山の上の風まつ雲の空なる世に
いつはりを時なきかりそめ人のよりとひつらむ

権中納言敦忠

夏よのあけさ増さる夜山の下紅葉の声もかぎなし

題しらず

前中納言定家

さくらさまてハいまたいかなる浪まさき秋の塩風

信実朝臣

末の松よそにみし夕暮に我身ぞこえし浪をこえぬる
ねぬまもる女こそ人にねぬよしもなくてつらけれ

前内大臣元良親王

いはむとも末の松山のなはこえてこゆる浪にもぬれし袖かな

光俊朝臣よみ侍りける百首歌に

前大納言為氏

ちきりし中の末の松なれやつらき浪にこえてこゆらむ

弘安百首歌奉りける時

ますらをのこよひ山のつまなくも松吹風の身にしみにけり

宝治百首歌奉りし時寄山恋

法印定為

こゑたてゝ泣ても尽ぬ涙かなつらき浮世の山のはのそら

永仁二年八月十五夜秋十首歌講ぜられしとき

月前旅恋といふ事を

権中納言公雄

まつ人も色なき月の影もなしつらき人の世をあはれ

恋の中に

平時敦

たのめつる人といひしにこりずまに月の影

平貞時朝臣

はらしき憂人今はいかくまし月よに心ある秋の月をも

永仁六年九月十三夜式部卿親王家にて
了月前懐旧

平親時

今はなきことさへしのぶとこぬまの恨よそえての月影

題しらず

藤原宗朝

重ねてはゆく憂世のうらみも出ぬる暁の月

衣笠内大臣

いまさら今は涙のますかゝみ懐旧しのばしけるさへすし

宝治百首歌たてまつりける時寄鏡懐旧

従二位成実

よそにては涙よりまさる露かゝる形見の影もなし

百首歌召されし時

法皇御製

懐旧もかなしきことをつけまちまし女院焼失のあとにて

懐旧の心をよみ侍りける

院御製

なをつくしましまこぬ比叡の御法の神かけし

土御門院御製

思ひきて袖をあるかな昔の恨をよそての見るにも

従二位家隆

とのつらき人の筆はし里の言のはゝ人に移すならん
さりしなす

平時元

いろまさるしもをまなつるの雲は紅葉にふかき色ぬ枕に

権律師兼世

打ねさへ恨むる雲の妬夜枕にてぬと人に知られん

藤原重經

思ふ人も待つに焼塩のからき恨はうとこそすれ

正三位為実

あかさてさへひそ枕しらつ更見もかへる恋の枕にう海に

定恒 百つもる年まつ時宮雲恋

花山院内大臣

枕さへ秋のねぬ夜は待雲にわすれぬかるれと
こひしなす

常風

鳴るとてかへるつきはなかきほ枕の竹も先にすまし
百つもる恨しはすなり

法皇御製

見ぬまでや恋も恨ぞうつろひのまつむかしは世にはる言のさかほし
近衛中将

従三位光成

うきは契らむ身のあはぬの夢にまでも枕やたえん

法眼行済

わひく方もなきなはふるとも浮田の杜にしめ縄

源親教朝臣

かけてこそは思ひしかとも葛原石田にさゝ柞はむすふ

前大納言通重

三かしまの柞のもとの原風に錦の露はこほれおちて

弘安百首哥奉し時

入道前太政大臣

かみなつきうつろふ人もなほ葛原石田の杜を柞風そ吹

安嘉門院大弐

柞原よそにみえしも葛原露そ人のかきみたれ

洞院摂政家百首哥に

前大納言為家

里の住里の笹尾の風さそふ山にも浦風そ吹

久安百首哥に

皇太后宮大夫俊成

うつろふは住吉の松にもあきは袖にそ露そおちし

典侍親子朝臣

かきあはすとしのいとの名とさくらいそらの雲

荒木田氏良

うき人のわすれぬの杜の草葉の中にかけりそあらん

参議経久

夢中にかへさてわかるとみし山草深み涙の露ぞかかれる

平時邦

わすれずよ同じ秋の松風にふけてより枕寒くぞなりにける

寂蓮法師

うらやまし人の思ひはさすがにもまたぬにたゆる身を歎くかな

平貞懸

契りしを山の井の水すむと見しはいかなりける心なるらん

大江政國女婦

ともしびもかすかにふけぬ夜半の月を思ひかへすも涙なりけり

藤原経定朝臣

たえまなき涙にくもる月をみてつれなき人をしのぶ夜半かな

権大納言実衡

むかしよりおもひそめにし契りをば絶えぬためしに世の中に見む

藤原懐世朝臣

かすみけむこころのおくをつたへても思ひしらるる袖の色かな

よみ人しらず

ねくもかひなきほどのうきふしをうき身にしらで恋ひわたるらん

今上御製

思ふこと人にしらせでいつまでか涙の袖をしぼりはつらん

よみ人しらず

一とせにふたゝびてはいてまきんゝき花にやよひはあらん

ちとせふの秋のなかはに時めくらん今宵に猶照

権中納言為教

よしさらはふるき此世を中々に夏の夕かすむなれたりと

百とせにたえしとき

藤原為定朝臣

よのつねの心にもにひきなき契りましのつらさとは

洞院摂政家百首にて恋

信実朝臣

かゝるを契とそむかしをいまん先世よりて人のいはまし

前太政大臣

人もいさつきかとをやかてかへらん秋はいつまてとらぬ月を

平宗宣朝臣に海を隔し住吉社にまたまつ

逢不会恋

法印定為

またも人いはまして年月のつもるをまつをかへらん

こそしらす

永福門院少将

こゝまぬ夢きいまその名のとく神中門のゝまゝそうき

権大納言典侍

後々つ契をひかりにぬるうきことを神力のつなくとをり

嘉元百首歌たてまつりし時月を

前大納言為世

憂ときは見たらぬ月すてに人の身なる覧思ひ知りけれ
百よちかきまてしらさりき

左大臣

秋はさのみ月もひとつをさけはつゆかる人のこころに

新院御製

つきともけはうき世の中なるいとゝく人をあはれさまし
影しらす

二品法親王覚助

見しもたみやこにかはるまてつきもうきぬめるかな

藤原経宣朝臣

つきもおもふこころぬ秋の夜にそうてらすらむつらしさまさる

藤原秀行

思ひは又秋の身なる人の根かたしらぬ人の憂も知らし

鴨祐数

晴すまて憂世のうしとおもへはてみる月の秋はなほよさ
よみ人しらす

見し雨憂身の秋とみぬ人をとりし人をとる月かな

藤原基俊 文イ

憂身なはつきもおもひてしのはし人をとりぬ月かな

前参議定節　折節イ

忘れ人ならずをつらぬかよそへき世を何とかせん

嘉元内裏百首歌に

前関白太政大臣

恋しさはさもこそわかめ何とてかつらさも人も忘らるらん

百首歌奉りし時

立よる人のつらさと思ふ世は我身なりとよそのうらみも

後九条内大臣家卅首歌に

前大納言為家

うらむともことわり我身にてよしなき涙ぞせくにしもなき

こひしらず

権中納言師賢

恨ともいかてしらさむ袖やつらさにぬるゝ袖の涙を

よみ人しらず

はらしきをその人めをかこたゞや思ふらこそ見えけれ

平貞時

うらみても後の我をも思はで人のつらさとさらにねたき哉

恨恋を

鴨祐文

命こそうきにつれなき我身から恨みなるへき人もかな

従三位為理

さても世のうき恨もなぐさまし逢を限の命なりせば

嘉元百首歌奉りし時同心を

前大納言為房

命をはつれなき物と思ひきや世のうきことは恨さらまし

戀哥中に

前摂政左大臣

かはらしよ憂もつらきも我は絶えぬ世にても人をと恋ん

藤原冬隆朝臣

たえましや我身をさのみ歎きても人のつらさを世にはまさし

正三位惟継

つらしともいはて人をは恨こそ思ひあまれる物は悲しけれ

平宣時朝臣

はしたなくうらみはてゝも我袖の涙よ我ふかくやそむらむ

藤原能秀

我身こそ人の心と知をきてや人のつらさも恨なくまし

弘安八月の比小白河にまいりて人〃に十首哥講し侍りし時恨後恋

権中納言為藤

恨とはいくとせまして恋しきも人にかよはぬ中の契に

建治三年九月十三夜五首哥に寄恋

山階入道前太政大臣

とのつらく恨をし忍ふのかくとはまたそらのみと歎けん

百首歌よみ侍りける時恋

皇太后宮大夫俊成

ゆきやらむ人を恨みんこともつらさは海より出し
影しらず

和泉式部

恨つらさよ人をのみ思ひそめてし涙の身にぞおぼえん

家に百首歌合し侍りける時恋の心を

左京大夫顕輔

はかなくも人の心を頼みてぞ恨てさえみしらず

よみ人しらず

続千載和歌集巻第十六

雑歌上

庭松といふことを

後光院前関白太政大臣

かすか山ふりさけ見ればみどりなる松は末遠く年ぞ経にけり

嘉元百首歌召されし時 松

法皇御製

経ても松の心よる今我よはまつの力と今を待

前大納言為世

年も一ゆきとしてすみむとなるかの松をまさん

弘長百首歌奉りける時 暁

前大納言為家

たつた山花の錦乃也秋ハ秋深よりさき色も峰より

百首歌よませ給し時　正三位為実

なつ山は八峰の雲ハなほかかりつつてさへ暁ふかき
名残ぞよその綿の中なり

前権僧正公雅

朝なぎてふくかり葉ゆるる此山のたかねの白雲

山中湖水といふことを

法皇御製

今ぞ深き山の高ねより落くる滝の音のさやけさ

布引滝とて　西園寺入道前太政大臣

山姫の手をむすびつつくくりあけ白妙さらす布引の滝

よみ人しらず　按察使資平

わき出る岩うつ人大滝のたかき滝つ瀬吹とさえ
元正天皇美濃国に行幸ましましける時

井手左大臣

滝にはも山三重しと大君のことしむかしをつてきけ

よみ人しらず

あすか川の滝れ帰らじと清き母の流ハまさるらめ

後二条院御製

難波かたあしへのたつの日影ものこゝろにかゝる

寛治百首よみ侍りける時岸菊

太宰権帥為経

住吉の岸のいはねになひく菊のみきはに松のかけやたえん

影しらす　よみ人しらす

朝日影さすや岡への松の雪も消あへぬ程に春はきにけり

寛元百首歌奉りし次に

法皇御製

いにしへの民やまとをいにしへに我ことよさよ立かへの代のみかは

萬葉集撰まて年久しく絶にし道住の江の言葉

よゝ繁る

権中納言為家

和歌の浦にあつめて光る言の葉の數よりこそ書は道

寛元百首歌奉りし時

普光園院入道前関白太政大臣

九重の竹のそのふもさかへます君かためしに言の葉の数

言の葉の道とてよゝに繁へる

前大納言資季

敷島の世にふりけり年をとゝめさていくとせつ言の葉の数

春雨中行

法務公紹

ふるさとは敷島の年ふる山陰に猶さそひてのこる白雪

入道前太政大臣

春霞ハ三山のたか嶺よりちる花にこそ年ハへにけれ

正三位実経

山さくら匂ひし重ねけむ千世の中の種原の春風さそひ

山本入道前太政大臣女

池のおもに乱れてうつる青柳のみとりハ浪のあやとこそみれ

平時村朝臣

たか里に先咲梅の匂ひきて風のたよりに人さそふらん

念阿法師

咲のこる老木の梅に西風難波の春の暮けりと

寛元百首歌たてまつりし時梅

入道前太政大臣

冬なから立かへりし春の袖にゆかしく梅の風

土御門院御製

えさし梅の宿まや鶯なれん匂もまたそのあかき風

従二位家隆

吹とくる朧月夜乃春風に梅もとのこそ匂まさりけれ

正応六年内大臣にて踏歌節会の内弁

つとめ侍るとて大臣辞申してのち

春月とよみ侍ける

太政大臣

しらさらく雲井に出しいさよひの月の影を

鏡しらす

大臣家房

すまの蜑乃まくしかれ網ミまなくも宿る秋の夜の月

前大僧正慈圓

哀なる世の中の浪に沈むとも月は見てを

西行法師

かくしつゝ月も昔のまゝなるにありし蜑の袖

山里にこもりゐて述懐になりぬらん

結ぶこそ有し浪路と

如願法師

鹿よ鳴て露よまつよ秋のよの庵の声

同じと

法印覚寛

涙くもらぬ空の白雲に都のかたみかけや立

建保四年百首うた奉りける時

西園寺入道前太政大臣

長月のよもの草木とも先にけさ雪は秋の霜ぞ

かゝ海と

後二条院御製

藤みやおもふ雲まの月よりも草木よ海

結花といつの時よ海を行まへ

かゝ

法皇御製

老の波こゆる人こそ年ことの花のもやまさるらむ

寄花述懐といふことを

前大僧正禅助

もよほしし九重といひし六十の春を人にまかせん

もろ中に

後光明照院前摂政左大臣

後の人頼み無からんみよしのの花はやよ世の春そまたる

もろ人やもろ共に分けし表裏の山のさくら風

関白よみ侍る

権少僧都能信

平宗宣朝臣

相坂の山の桜や咲ぬらんゆききの関の杉むら

遠島花といふことを

藤原隆氏朝臣

浪の上も花ふきたつる風ならん浦のしらなみ花の雪

前大納言為世家歌合に

春鳥花といふことを

法印長舜

よしのやま花の下もと白雲のかかる山にも行やかへらん

題しらす

僧正道順

ふく風もさそはれてさくらちる山は花のとこなれ

俊恵法師
わくらはに花のまよひまく山のはにてもまたなし
立まよふ霞も匂もひとつにてそむねさめの匂ひ
大江宗秀
よしさらはちるとも花の匂ひ梢のこゝろ見ん匂ひ
祝部行親
吉野山みねの桜の色なからかすみもやよひの匂ひ
源重泰
みよしのゝ人はしらん山桜ちるをまつとはいつれともなく
祝部行氏
中臣祐親
老らくのかさしにみせん桜花はし計人なかくも見えそ
人こそあつまりてさくらの花の下にねてあかす
山田法師
めつらしき物はおやなき桜もこしの春にわかれする
たゝしらす
示深法門
出やさき人ふかくこそ思ひけれ思ひも哀と誰にさらん
はた守國助
見て世の憂をとはしや山桜よしなくのむともとめん
有原泰宗

木のもとにむかしの山桜のこゝろはむかしのひかりなりけり

藤原定成朝臣

桜さく山のあらしはいねぬかり梅花の下にぬ

堀河院くまゝ世桜の春もと兄(?)ゝ

侍権中納言俊忠まへまいりたまふもの女を

中宮女房の中よりとくまいりたまふよう

ことてやつかはしける

京極前関白家肥後

桜花雪と山ちにふりけれはとこそ人のきかまし

かし

権中納言俊忠

宮ことふ花ならぬねも言とゝはゝ源よまれるさとも

読しらず

中務卿具平親王

花ちるとかけてもいはし鶯のなくね声を聞そすれ

陽明門院

宮こなき世とうらみの渕のつよく理なれとる桜の

色はよつけく雨にぞ霞かすまへつるまゝ

光俊朝臣

と年経てちりもむかしよりまかせのことにうつゝるやへさくら

もえこてよみける

平行氏

みちのくにあたくさのまぬかれはゆくちるもかしもの

西行法師

みよしのの春とや風もさそふらん霜にはとてもさえまさるかな

平時親

此風のさえてあらきも人とものかはそれすさ

前大納言為世に歌を給しけるに夜もと

法眼兼誉

ちとせみなかきりそめしてよその末はるかに緑の白雲

歌合に　在原業平朝臣

山桜の花のあはれはここそはいふぬ冬にははなかれけり

弘安百首歌たてまつりし時

藤原為明

よこ浜の波いまのよまでもたえずとて

前大僧正慈性に歌を給ひけるに年ことに夜ぞ

権中納言公雄

七十のよそちのとせもさして老の波よりかへらん

夕卯花を　従三位隆教

月をみるくもやこころにかよふらん篁の籬の山におさけ卯花

前大納言為世に歌を給しけるに卯花

法印定為

みるもかくともかくこそはさけ卯花のよせへて帰るかな

夜方中に　　法眼慈鎮

世中よいふかひなき人とはしらでたのむもの夜はかへさん

右兵衛督基氏

此ころぞ字かゝれあけぬ草葉のうへにもあつさ夜半

法皇御製

ほゝゑてみしよりもまた草葉のうへにおきけるは世にふるまゝに

後一条入道前関白左大臣

きゆる身の露をぬ霜とやかへさん後の世の草葉におけるよ

百首歌奉りし時　　権大納言経継

とふ人も庵の涸れかけさらん月の影はやまと摂子

契しらず

賀茂定宣

つれなさを我もかさねん時鳥しのひつれなき人をまちなん

平時香

絶えなる山郭公一声もまたねおもふ短夜の空

安倍忠成

あやなの夏の夜にしらぬの時鳥見てもかけしそらをや

菅原宗経

かゝるさへまつつらんる親將その草の風をまつ音と

前中納言資名

けふよりは鳴て過つる時鳥またまちわびぬ秋のよすがら

高階宗成朝臣

紅葉の色にまかへて郭公なきつる声を人もきくらん

覚空上人

ゆふくれて鶯つる池をも子規なきこえてまちつるかな

藤原邦氏

宵の間の月まちいつる山の端にまつもかなしく子規哉

平義政

子規初音の月の山のはに聞く秋深き空に鳴也

三浄法師

一声と人にはつけよ時鳥すきかてぬと聞きたつかな

藤原長経

まけえん袖こそぬるれ子規その声や人に深すらん

白にも子規といふこと

藤原隆祐朝臣

うちとくる程そ郭公まて山の松かけのちかき

藤原時親

時鳥むらさめなかすゆふくれし山ちをそのかみ
五月雨も山しものゝふるまきりけり
ゆふくれはおやのまつにて

按察三位為子

いまくまもりとさし時より袖のうきことはわれもかはらし
殷富門院
秋のよもむかしをかけて袖のうへにけふきくかなとさもある
光家の後言つまさりきなる人のうへ月夜白さら
ぬれねとつゆそすとく
入道前摂政太臣
わやかたよを離てもすむ涙の袖にあはぬねそなき
ぬし
涙の袖にかきあてわやかたよふねそさけ浪よる
よるへしらす
前大納言為世
世に海を渡し来白浪たちかへる中に
法印宗源
たかねのともよりいまはなにとなくしもとふ時まし
宣朝臣
ひまなきてもやへの世をそて我袖かけし影のうらみ
平宗宣朝臣
すめるなき花も若の袖かせはつけて人とも山のは
従三成賢
藤中の月夜と
藤原秀能
ねもつとしくさぬらん猿よせおろす山の月夜の空
みち白雲そたちまよふ
前大納言為家

夕月夜のまよひ庵の秋の袖ぬれて露もとまらでやならん

題しらず　西音法師

かくてしも世にふる身かと哀なる峯に庵の夕月夜の空

平貞宗

涼しきもねざめにかよふ袖やはらふ荻の葉や夕月夜哉

大江広房

夕月夜の雲ゐにみえし山の端にまつほどしみる夕月の影

玄昭法師

経秋の月にへだてて老人の涙ちかぞへてあはれなる袖

嘉元百首歌奉りし時

前大納言為房

あつき日も窓の螢の光まてよるもかたえてそよく涼し

題しらず

風さそふつゝの川は夕暮に山陰すゞし蝉の声

惟宗忠宗（定イ）

静仁法親王

泊瀬河夜わたる水のさやけきにかけてもすずしき浪の白糸

水邊納涼　後二条院御製

涼しさは夕暮ことに知られけり手の袖に吹くる山の下水

世をのこさく夏に六月つこもりの日によみ侍る

惟康親王家右衛門督

は桜ちるやいく年まぬねらん新古今つきみえ命すれは
初秋の露よ

権大僧都重喜母

三輪川の岩江なかれの一夜もきえてかれ秋の初風
松吹中よ

平時友母

六月まきてなりしちよの霜絹をの声十九んたて

前大僧正良信

いまさん秋まもわすれぬ人をも越思ひぬすて候とよ

紀宗信

さ尾高と源のことをかへりん寄もなすさ老の枝よ

津守国夏

白雲何そとこん人すり源と老とろの人れ秋まれす寄

中務卿宗尊親王

露おたえくまとをうらしくもまさの秋ゆふ雪

後鳥羽院御製

嵐の風のをよをてやかくてまもしるいまきつ秋まん露よ

後二条院御製

いはれと初秋風の吹しも袖よ涙ぬ寄まん白雲

前大僧正良信

人とこて年なる新の玉手まへと秋風よ寄そこかれて

前大僧正道玄

宮こ神代よりしくや草の袂れにたへかねつゝ
恵りなすちよの海を伺をするま述懐
入道二品親王性助
世中は秋の草葉を吹風の露をこそのこりけれ
後嵯峨院過侍りにしまへしまゝ法座の
なきあとまでしのひつゝもおくるとみな御筆に
人のりをへやけれしまか
常盤井入道前太政大臣
おもひし露のけてもさやかにきこゆる夜の法の声
ためし人しらす
君なくて人のまへん白露れやそて袖もかはかぬ
正治百首たてまつりし時
式子内親王
尋ねきつる夜の里の篠原しけき露のみ袖
題しらす
太政大臣室
露さゝけひとりさかる山田の庵りの袖ふかき
前大臣
しく秋霜はの風にさそひて露もり庵も稲葉に
氷室上人
枯きてもちらさしやはらの生田の杜は麻のはなん

上西門院兵衛

侘人の松の孤笑は出てきゝ麻の衣きぬ山里にかな

天暦二年四月蔵人所歌合に風

よミ人しらす

旅人も苦しき道と松風の吹なんまてハいそくまし

題しらす

大江匡國女

あま火焼難波のこやに立煙月待山の空に立そ

藤原親範

かつらきの峯の嵐は松風となりまさりてそいつく

行徹法師

嵐吹山のみねの浮雲の晴てそすめるいつ月影

月透窓といふことを

前僧正公性

ゆかさの袖まて月ハさし入ぬ人ハとひこぬ松の山里

山家月

津守國平

年へぬる松の樞もくちぬるにひとりやすまん山の奥の月

松中月

藤原教家

雲もみぬ嵐の山の松かえにまてその里に月そやとれる

源親長朝臣

松を洩く人もこぬ夜の浦風ふけてよの月に独見る哉

行親法師

ころも雲の物おもふ袖に月さへもくもりかちなるよはの空かな

百首歌奉し時

入道前太政大臣

かけやとす程もあらし涙の月にぬれぬ袖にはなとかは

前大納言為氏

月のはれまもつれなしやけりさも絶さりけるをもつらしとは

平親世

うきよとも月のはてなくて見ゆるなへもかねてこゝろしらなん

前大納言為氏

山のはの月をまつとはねまちをもなかめてよはのあけかた

題しらす

従三位成久

終夜秋の涙は袖にあまりてふるさとの秋の月をも

平時氏

夜のまを袖にやとれる秋の月うき身にさそふ影やなからん

月前述懐を

平忠法師

憂ことをおもひつらねて涙にもくもりてそ見る月のよなよな

前大納言為世

いくとせの涙とゝもにくもりけるわか身のうさは月のあはれ

弘安百首哥よみ侍りし時

二品法親王覚助

雲晴てのとけき空の秋の月常よりもさえて見ゆる
影しらす
藤原保綱

うちまよふ光もまさりゆくさき山のはの月
法印部任

誰又へともしらん清見か関守の峰の松か枝秋の月
中臣祐殖

ちやうらみといひきて清見か関すへて月は宮やさえまさる
藤原忠綱

得そ秋物まるいまに浦くて澄る法浦の月の月
法印清秀

かくしまの袖の秋風吹にまさる夜ふかき夜はのさむしろ
大江経親

衣しもふさの霜尾のわさ衣ふけてや露かなん
前大納言基良

神無月よりもらく深き冬となるまてよ見ねの木葉もしくれて時雨
源清兼朝臣

冬の夜の枕そ見えし時雨深く霜なり山の紅葉
大中臣氷親朝臣

山めくり与にいてし世と秋の袖の時雨の跡もまた
清原元輔

風さそふ秋の葛葉の松つのゝ世よりかれ
紅葉を人の折てそせけれ

菅原孝標女
いつまでもまよひし秋を神無月の世を秋とつけけるは計い

永仁元年亀山殿十首歌に暮秋

前大納言実兼
世を秋の梢に紅葉むれふるを時に秋のなこりと

題しらす

中原師宗朝臣
暮てゆく秋のなこりをしのふ山麓にしか鳴わかるらむ

後光明照院関白右大臣家六首歌合に初時雨

高階成朝朝臣
晴ぬとてねなましものを横雲の空にのこりて過る時雨かな
時雨とよ

権中納言公雄
冬枯の木葉落葉の涙さそふかなからぬ袖にかゝる時雨は
おのづから涙を添てふる時雨

浄弁法師
けふよりの時雨に何をそめかへん木葉は秋に染果てしを

題しらす

前大納言基良
いかにせんたのむ木陰の時雨ももりてまさる秋の涙を

大江[illegible]

あらしの山にかゝる浮雲のはれくもりてふる時雨哉

中臣祐臣

色そむる時雨と風にさそはれて空にしられぬ木の葉の月

丹波高長朝臣

こゑしてもまたにぬれぬか紅葉の又時雨ふるかつらきの山

大江貞房

はれてふる時雨のきはに山の名にけふやはちらぬその木枯

冬夜月の浪光乃社と見えて

前大納言俊光

神な月老曽の杜の木枯に木葉よりふる時雨哉

落葉を

藤原秀長

かる霜にぬれてたゆまぬ木葉のしたにかくる山人

冬の歌中に

藤原経清朝臣

昔夜折袖ほしあへす袂にふりし霜をはらひ捨てし

前大納言為世

人ことにとくる緑し春日詠す

冬中に

前大僧正道性

吹とても枯はやらす霜の下にかくれし草のうら冬風

弘安二年亀山殿十首歌に朝霜を

前大納言為家

亀山や朝たつ霜に折かへし袖のかさなる秋の衣

題しらす

土御門院御製

かけろふの小野の草はの枯しよりあるかなきかと問人もなし

永福門院

天し女袖ふる夜はの風さえて月もよそにみゆるやらん

権中納言為信

よくらし嵐の空は雲まより影も雲ゐにさゆる月かな

よみ人しらす

浦風や吹まさるらん夕しほの磯のはまへに千鳥鳴也

在原範秀

海辺より海のひろさはみえなくてはるかに立る浪かな

津守経国

古のわかの浦はの名にたかき玉もの跡のあるにまかせて

無き人の跡をもしのふなかにたにつもる浪かな

永乾門院兵衛

弘安百首哥奉ける時

亀山院御製

湖の海やけのみゆる都まてなほ浪路よりかすみて

雲のかくつゝて絶まはかりに比叡は観音の

ゆきまつるきねまよ

むかしおもふすかたつくしの花を霞にこめて

[illegible]

入道二品法親王性助

ふりつかぬの冬は浅見えとく雪よ知りて冬のこの葉

前大納言為世よ歌を御しる日詠ける中に

法眼行済

とは世に言ふてまかる老か見れ山にふかくつもる白雪

嘉元百首歌奉りし時雪

二品法親王覚助

か雪もふつもつひよ見れ山をしのすみかなる

題しらす

能河法印

跡絶えて今は山のおくの雪まよひ世をしりかほなる筆て

よみ人しらす

かりまもる沼も尽しをもつもるや老のゐみ雪の跡見れ

こえ大よ

前大納言為家

消えて跡つもりし老か世の位のころの園のこえ大

藤原基任

暮雪の心を

老となりてつもるもえをもよるもし君の年にはふる雪

嘉元百首歌奉りし時暮雪

津守国冬

行かへる年はくれとも鳴きて筆にかさねて絶かへらん

題しらす

従三位氏久

はやせも氷とむすびて音よりぞ谷の下水まさりきこゆ

嘉元百首歌奉りしとき 実兼

二品法親王覚助

横山にても拙うき霜雪のきえかたきよそへて年ふれ

弘安百首歌奉りし時

前大納言為氏

ともかくの雪につけても渡よりつもるは花の年もへて

續千載和謌集巻第十七

雜歌中

弘安百首歌めしけるついでに

亀山院御製

わきてなほ空なる星の数よりも年ふる世ゝにいつしかをまし
山月とゝふことよ海を行まゝ

法皇御製

雲ゐしはやの山の秋の月にそひ世とをもてしはしれ

百首歌奉りし時

權大納言定房

さすが又かくしとぞいふとをははやの山の月やさやけき

題しらす　　山本入道前太政大臣

津ゆふきはとふ人もなきやとにて月をともなふ

住山のかたそともなくてけふはるゝのかぬるはは月そのそら

前参議能清

すみ染の袖に涙をかはしても月もうつれは秋のこゝろ

権中納言公雄

及安百へ(?)ゐろ百まで泪

亀山院御製

かはらしな涙やくもる月かけは袖にも宿る秋の夜の月

題しらす　　宰相典侍

嵐のみふけゆく世をそむきても墨染の袖の月のやとりは

前僧正実聡

清き野に影そうつろふ春の夜の月の光は袖の月

右近大臣宣

かゝるさへなくさめかねて秋の夜の月のまゝなる袖のやとりは

権僧正道意

後にはるかに住やせむ世をはなれても月は山にそ宿る

談天門院

深き山へ入つる人の世のうきをしらぬ山の林の月

後照念院入道前関白内大臣の時歌合に暁月

藤原雅仲朝臣
山のはにいさよふへき月秋ならてよにすみはてぬ
秋の比述懐によみけり
西行法師
世と秋は山の嵐はいきまきにそてのとめたる有明の月
月前中夕
宗光院入道前関白太政大臣
王昭君は山の奥まて友と成つる月の影は
山里にすみかりてなかめつゝそて
従三位成久
はるゝと思ひし光もかゝりの世にわか出てゝはなかむらん

前大僧正慈円
無動寺にする日の山籠して
ゆきかへる妻の法につかひしまゝ
源兼平朝臣
いましてと思ひすへまし世のうさにあつる心の深き山に
かし
前大僧正慈円
都人思ひやるらんかなしきはむかしのさかりの折と思ひて
詠しけす
康義門院
よのつらさ思ひしらるゝ人もなき庵の嵐にまかせてそみる
古河松と
前大僧正慈円
待つ一夜の程も寝覚てかたみの新たによるか雲の一村

離山の後家松述懐といふ事を

権律師仲弁

何と又秋立松木本年をへてすまゐぬよにつひぬらん

平時迩

憂世をはやくのかれなましかは山の松ならましを

よみ人しらす

思ひの憂世を我の草のいほり住てそむきしより

内覧内侍よつけまゐらせ　九条右大臣

世をそむく山里に袖なれけくもかはらさりけり

なかなかていつまりの松よかけつゝ秋

前大僧正行尊

いとふへき草の庵りは荒けさを紙の柵とにてもとゝいは

述懐と　寂超上人

とはれてもいつかは山のおくにつらなりけり世をそむきつゝ

前大納言為世

山陰の松はさひしき嵐そとこれにもとめて吹まよふ

二の(?)は親王家百首よ同し

法眼静范

とはつる松の梢に吹しく嵐もたえぬ草の庵

題しらす

寂厳法師

人も住ぬ山ふかくとも厭はけよ世をいとへ捨ぬ身ならん

洞院摂政家の百首歌に山家

藻壁門院少将

山ふかく跡たへ人の庵とても草のとさしを誰かとはまし

同心を

法皇御製

尋来てとふもうれしき住居かなむすふ草の庵

宝治百首歌に山家嵐

衣笠内大臣

まつかせは峯の葉をわけ苔の間の嵐の庵何とくらん

山家を

後光明峯寺前摂政左大臣

世のうさはなれてそさしも厭はれていつまても住はつへきか山ふかくは

津守国助

山里にいはもる水とよそにききしへたてぬ人のみえもこそすれ

法印良業

住はてて後そ心のかくれかはいつ山里もうき世なりけり

権大僧都良覚

山深き憂世のかとをいてつつも深いるはなほすみの袖

延政門院一条

いつもあかて住し山里と憂世へたてぬ人やなからん

入道親王尊円

山里のさひしさをこそ思ひすてとこそおもへ秋のまちまし

平宣時朝臣

山ふかき人の住家やさこそならん花にはうき世のへたてなりけり

惟宗時俊朝臣

山ふかみ誰にとはれて散庭の花をもたれかみん

寛元二年大和記にかきてまゐりける

中原師員朝臣

花の下いつのやさしき嘆わすれんけふかたてきてこそあはむ春

西園寺の入道前太政大臣に住侍りける時つかはしける

前大僧正慈鎮

嬉しさをつゝみもしらぬ袖にこそあまりけれとて返し

西園寺入道前太政大臣

袖にこそつゝみもしらね嬉しさはなと我身にもあまるへき物かは

皇后宮大夫家にて中秋の時をよみ侍りける

読天門院

さやかにも見えて晴ゆく月かけのいつのまにかくしくも見え

同題

皇后宮

秋の夜はいとゝ月かけつゆけさそそのまゝおもふ

大炊御門右大臣久しう出仕せすと聞侍りける

みしよ

大納言実国

ともさかる和歌やまことのみちをたつね清きを
花の後こそ守りなて御めくみの人の身てまさうさ
ありけれ

清少納言

君か代はいくちとせとも数しらぬ神のかみや御しるしに
忠義にて人をもまちて御よろこひまさりて御代
をなかけれ

左近大将朝光

けふよりは千代の松をもちきりけん天の下なる梅か香そ
ちまたおきて御まうち時かさして御まうち梅とこそ

山本入道前太政大臣

色よりもなかはよりし松の霜ときをまちいのちなかき

寿永百首の時田家

太政大臣

松ふかき門田のあせに御まちて門人の今ころ世をかくすらし

述懐の心を

清下業篁

うつりゆく月日はやくも老の浪よそにこそきくとおもひし

従三位行能

おほむねの千年もかねてこゆるきの世の波にも袖ぬれて
おほきみのかみやすらひつくしたまふ人の
よるよるかさねて人のまもりつゝかへしまつる

式部卿

よもの海に波こす雲のかゝる嵐やいつまて観しらす

相撲

憂世そと思ひ捨ても命こそさすかにをしき物にそ有ける

藤原清正

命とをしむかひもなきに憂ことあらはなからへけり

法印俊誉

限ある命のほとはまかりてつくしのあはれ世をおもひやるかな

平行氏

いきて世の憂に捨まつる年月はなかなかきまくての命なりけり

前大僧正に侍ける時述懐を

法印玄恵

はかなくて世に有明の月もみる人ゝをしつかにすむ物かは

法眼行済

憂ことはこゝろにうつすまても命ある老の身にそ世をつく

藤原利行

何ゆゑと思ひかへすも老らくの身のいまさらにすてしのひぬる

丹波長朝

はかなしやいつかはこの命とてけふまての身とおもひけん

権中納言公雄

いにしへもありける世にも亭子のみかとはいまもこゝに

嘉元百首の歌の中に述懐

昭慶門院一条

かなしさの色にはいてゝしのふれとしられぬ袖はいかになかれん

題しらす

津守国冬

玉垣よりうこきなくさまりて道をこそしるへきものとおもひなれけん

藤原長経

古をしりまほしくぞ我道の跡をたつねしまことしるしけれ

題しらす

道の跡にあらそひつゝなく思ふ時にもまよはぬ〻かのまことの袖

惟宗行政

一

終までと思ふすくなき清きのみ遂かたき命のみこそはかなかりけれ

前右兵衛督基明

かひなしや年をかさねて思ふらむ様にそのこの命なれは

春宮権大夫為忠

子ならぬわかすむ世をそむけはてゝは思ひをも観して

嘉元百首の歌の中に述懐

民部卿実教

年月の多くふるみもみなしまことにつもりきてやあらん

遊義門院

同心を

うくせにやすむ命もやすらはゞかくて憂世の年をかさねん

天台座主慈勝

憂しとは世にある程の歎ぞと思ひすてゝも何歎くらん

平宗宣朝臣よ勧めし住吉社に奉りける中に

述懐

法印定為

数ならぬ世にも人にも知られずし神の恵に逢ふぞ嬉しき

述懐歌中に

前内大臣

ながらふる世に住みはてゝいつまでか数ならぬ身もをしからまし

平貞宣

今ひとつの憂きにまさりてやすらはまし人の心をなげし世ならば

平政長

うききかたをすてゝはすまぬ身のほどは憂世そむかぬ心なりけり

度会延誠

かくて世に憂きをもしのぶひとすぢのかなしさとなる身をなげくかな

平氏村

いまさらに歎くまじ憂世といつはりもすてゝもしのばれん

よみ人しらず

憂き身には憂世とこそは歎かるゝ世をそむく人もなけれは

源親教朝臣

いすゝ川ことしまの浦かせに打寄せてまつよる神世と
後光明峯寺前摂政左大臣
年わたり三條まてわかぬ跡として代々のまもりに沈娟
百首歌よみ侍りし時
前関白左大臣 押小路
世々の跡を名計にやあらむひくやうまもりのやまとのみ
題しらす
中臣祐臣
よつの跡ゆくへ人ゝにちりぬる世のならひもことのはにして
卅首歌よみ侍りし時
前大納言為世
跡とめて書うつしとふるも我家の道をそわすれき
述懐の歌とて
中原師宗朝臣
世をいかに何よりのよるそとも三代家のしれるつき
家名述懐といふことを
源長朝臣
和歌のうらとふかくやふ秋の露我世深くも霧に帰とハ
題しらす
前大僧正守誉
守りこし老の社の名のみにて世をは渡らぬ暁ぞうき
法印俊誉
吉河のね覚めにて世中の憂きにかたよわけ知りそめけん
前大僧正実承
ゆくすゑのみちもかきわけ秋の夜の寝覚の老の枕さえに

法印良宋

あらしの暁かさねてすゝむ老の寝覚やたちかへるまし

法印弁俊

時のまも老の寝覚は見ぬまゝの夜ふかき暁のそら

権僧正公意

うきねの夢は煙たく見えすなりも明のしるしは

権僧正光慶

世の中さく連ひし夢の見えてゆくよりの眠なるらん

右大臣為後如此其大夢やとなそ

太宰権帥実音

夜中よ夢てを人のうつゝに見えす侍く現なりてき

法眼行済

うきの身にたえ出ても夢なまゝに現とそ思ふるかな

左大臣

影しらす

わするらし夢もうつゝもかきぬは六十年なすよりそめそり

百なかたまし時

二品法親王覚助

数ならてくものか宵もねきまぬ老の寝覚にかゝる夢そなき

日吉社よまれる百首の中より

前大僧正慈鎮

徒の音よ夜を寝て秋もねぬなるらひかくよ置也

題しらす　権少僧都数俊

吹まよふ嵐にかゝるしら雲ハ日くれの入江のうら

太宰権帥実香

鐘の音ハ跡ハ夢ハとまけとねやの人ハねらすの思をしらす

藤原保綱

秋霜と新るの錦大世とてくかけらぬ詞とありかぬ

百首歌奉りし時　前関白左大臣

道までも見るのみを極とりしと九重の庭も旦

果度とのみこて人のもとにつくしまかう

丹波氏綱

世とせくおもえつ雲のうよ又立かたれときゝや

題しらす　従三位親子

住捨し庭ハむかしの跡ありてのこれる松そ久しき

従二位服氏

住山かくてみねゑれの松に一ありの末よきれよ

寄たる述懐といふことを　前大僧正道昭

ミ山の岸くその錦のまよふ嵐もふりかゆすとは任ちて

弘安百首歌奉りし時　前大納言経任

二代まて君にみえける鏡山くもらぬかけはいく代なるらむ

嘉元百首哥奉りし時関

一条内大臣

立かへり又君か代に相坂の二たひ雲路にまよひ(?)ける哉

百首哥奉りし時

関白内大臣

吉野山心しらぬ(?)雲の上にたちかへる二代のかさしの花の春

中納言経俊すゝめ侍りて吉田社家にて

一首哥よみ侍る

前大納言俊定

いかにしてしらてすみけむ白川の流をさらに人のとふらん

嘉元百首哥奉りし時河

前大納言為世

試まてん世によからぬことをつくつくと数ならぬ身の涙(?)をもそへ

権中納言公雄

ともすれはうき流のみまさりつゝ清きをもとむる心の水

述懐の心を

亀山院御製

法の道跡はかれぬるわれの世中をもとのよとまた思ふかな

前僧正公朝

かくてもあさましき身はいかならむ白髪の末葉の萩原やまとに

寄述懐といふことを

法印禅澄

濁らじと思ひしてや流れをも人てたのまん

正元百首歌奉りし時

前大僧正道玄

このみやかみとあらはれし柏木の世々もたえせぬ流れ一すぢ

題しらず

前僧正道性

一すぢにたのむ誓の思ひ川かゝる剣をいさぎよく渡

源貞親

さりともとまかする世をも神のめぐりやとこしへなるらん

参議雅経

年ごとのみそぎは今日の宮つ瀬にても世をいはふらむ

新後撰集にも見えたり

平貞俊

そのかみのよりしよりすゑもかはらぬは鶴が岡べの松の浜

為世あづまにまかり下りけるに平貞政朝臣にたのまれて侍りける時鶴岡の宮にてよみ侍りける歌の題をたづねて侍りし時よませ侍りしと

藤原為継

いまも猶あふぐ心のふかければ代々の流れに宮の浜

前大納言為氏續拾遺集ひとくさに也

又人々によみ侍りける中に

惟宗忠京

わかの浦によみてもいかて玉津嶋月光の秋にまよはむ
数しらず

右原忠定朝臣

いしをきかくもいへはわかの浦に沈まぬきこのみ

右原業連

世と海の底に下草縁てて流れてぬくも根つよし

度会朝棟

行末のためとや思ふかしこき葉の枝の杵は

玉葉集によみをかれしさとをけきてよめる

権少僧都能信

行ぬ人はしるのみくまてく流むれに書し古跡

津橋ともふるの柱のりてけ縁むる

常盤井入道前太政大臣

立かへしいかも清き橋柱朽てやよせん人と渡さん

かの橋柱法によるまでうつもれまじく絵ろ

頓空上人

渡ときこえたりけるなかし橋柱朽ともぬしのこともありて

弘安百首の歌奉りける時

民部卿資宣

身をつくし世にふるあはれあり橋柱朽ぬはかりに朽のこる

題しらす　　権少僧都実鑒

年月をへての高橋いさつてまこむとてやせとやまとらん

藤原隆信朝臣

年久しく岩間をてほ度とゆきにくき絶まつかの浦つゝしまの

返し　　後徳大寺左大臣

いかにせんかゝる思ひにあらましとしてみまたり月の雲の絶えて

返し　　隆信朝臣

とりしてまた涙り月のかゝきえしいるふ雲見えて又くもしき

続千載和謌集巻第十八

雑歌下

題しらす　　中納言朝忠

世中にたえてのこと思ふくく衣着にしむ事もなけれ

よみ人しらす

定らぬ身のもてしやみの秋にも月見と袖のなきや前にて

亀光院入道前関白太政大臣

古のあふやたきつてとまり月におもかねしとりなりけれは

月催懐旧といふことを

藤原忠資朝臣

忍こともかへらぬ月の俤やたゞ月の前にしのふらむ

古への月といふことを

後京関白前太大臣

しるべせし昔やとはむいにしへの秋すむ月にとひてやみまし

住よしにまうでける時七月十五日人々に歌よませ侍りけるに

百首歌よみ侍りける　対月無常といふことを

よ海将きまゝ雲とち

後二条院御製

詠めてもしのびしよそに出べき月をこへへつまつあれ

西山にすゝみ絶るをはるかに絶たる

しのぶとも立ぬ夜の月さへやかはらぬ影にすむ涙の袖

恋しらず

慈道法親王

いく秋かかはらぬ月の庭にすまん跡をむかしの庭にたつねて

宗禅法師

三海の歌この里は秋の月秋はむかしの秋

行楽法師

紅葉よりうゑぬ庭このしらん月はむかしの秋をまちて

法印玄守

見し人は先立ぬるをみるも涙はつらき月のひかりすさまし

西音法師

雨中無青といふことを

後光明照院入道前関白太政大臣

昔思ふ老の涙よりこそ知られけれ秋の時雨の時雨なりけり

詠しらす

雅宗忠秀

古の都の中の赤水まねをこそ袖ぬらしけれ

法印取範

初年ハ去年は守のこゝろよりつもりぬ老の時を出しき

丹波長忠朝臣

とはるゝ八十あまりの友もなし誰とこの世のことを語らむ

後光明院入道前関白太政大臣

哀しひしらまもなるてくむしとこる老のこゝろハ

人こそしらね年ぞ多かる涙なり

後鳥羽院御製

みとりぬ青の人此世しらぬは此世とをけくわすれぬる

懐旧の心を

前参議雅有

むかしまて昔を思ひ出ぬ身ハ何のことも無ありけり

独懐旧といふことを

藻璧門院少将

哀難もきこん人重ねのこともむかしこそありけり

詠しらす

天台座主慈勝

ねくよ思ゆるといふへきやまとこそりまきそめ青ちと
行末も程てくやのまきまくいやと我方の六生まれん
よみ人しらす
岩蔵源兵
とまねまく六出も千種とは故思ふましくぬらむ
菅原盛道
ときえよしし也まよとぬ思ひてん夏母まそさ六枝しら
従三位貞長
春きくの枝さいやさし六生く思ふへかりしくつしきせ
菅原基有

六出のあとを春方よそちてもたつらぬ思青なりし
後光院入道前関白太政大臣
治る夜の松とねらよあらくしくしとみきと班みる恋
深草のみかとの御事よりて懐旧といふことを
よみ侍りける
民部卿実教
はかなくて昔となりし深草の里はいくたひぬといひきまし
よみ人しらす
従三位行氏
花ぬ里ぬる内も古のかすりてそ夜よみ見え
入道二品親王性助
なつ御よは夜よねもも古をいふしまても行思ふかせ

伏見院に百首歌めされける時秋歌

伏見院新宰相

秋とのみ結びし庭に思ひ草くつ葉の名残は
挿女の心を

平親時

一秋におくれし人のうつり香は秋かたみかる床の月(?)かな

題しらず

行蓮法師

それも世はいつか立ちなん背く身にあすはおなじ

前大僧正源恵

背くべき捨てし世をなほ思ふ心やはかなき

よみ人しらず

山ふかく住みてはさらに友もなく我ぞ背くはうき世なりけり
後の年を惜しむらん色はなけれど住まるる世なり

前右大臣

しさらに捨をゆかしがる人なき世なりともあらはねぞ

明雲法師

住まひて背くうき世といふ心によりてかはるまにまにぞ

百首歌奉りける時

大僧正道順

捨てうき世のことわりは知らずとも思ひ知るらん

題しらず

法橋桐真

憂くひに捨世をかへりみんこそけに捨身をそ猶と思ひける

平宣時　時房ノ

捨る世すしもあらねは中々に捨るねこそ住よかりける

賀茂基久

かくてのみ憂につけてもいつまてか世を捨かねてやすらはん

平宗直

定めなき思ひはすは世中の憂にやそへていとひそめまし

藤原重綱

いとひても猶捨はいつかと思こそ捨世にこそ年のへにけれ

藤原親氏

世を捨つ数にはいつか遁にけれ憂身の末を猶のもとと

前大僧正静定

いとひても猶捨かねつ物さへは憂世のつら山やなかりせ

中臣祐春

一すちに山のおくをいそかれす住すてぬへきつらさねも

源隆泰

憂世をはいとひそてぬる境の奥山のおくをすまゐも

昭慶門院一条

猶すてゝすまゝくやまにかくうきかゝる山のしのひもかな

平時常

捨えんほとこそ人に世のうきといはてやむとも身をおもひしれめ

述懐の歌とて　　権大納言兼季

あらぬ憂世中のかりの宿はいつくにまさてつらからん

院御製

晴る尾にかすみや果のかりてよは侶しきても衰へぬまて

前參議雅孝

何故に背きもやらてなからへてつらしうき世をすくすらん

思しらす　　慈道上人

なとて憂身はよしや吉野河はやくは世とはいひしかと

権大僧都厳教

憂こともなくて世を出すへきいつか限よ身を歎きまし

平宣時朝臣女

しらはや世をも捨ともわか身の憂なりなてそ猶なけかるゝ

権少僧都宣源

身をさそやつのまよひよけきしもさうし世をのかれて

嘉元百首歌奉りし時述懐

うけしよ憂身によそへつる世をすてゝも山のおくにかくしめ

権中納言公雄

同心を

捨し世のなをしや何をしてかは憂身をなほ歎くらん

出家の後年比申なれしもの世をのかれてとひ
後世もたのもしきよし申て侍けれは
入道前太政大臣
いけるよのならひと許ふる人の後世まての友をかけける
かな
よみ人しらす
筆のあとにのこるもうれし後世の友とたのむときゝし嬉さ
読人しらす
蓮性法師
いかにしてうき世に心をとめても世をそむきても人まつや
寂蓮法師世をのかれ侍ぬときゝてつかはしける
しるらむ
後徳大寺左大臣

世中をそむきはてぬといひおかむ思ひしるへき
かし
寂蓮法師
人まさへかくしも我のあはれをも世を出家の事なときこえし
大原にまかりて善寂房のあとをとふらはく
後京東上人みまかりてつかはしける
常盤井入道前太政大臣
嬉しくもまことに山のおくにすみ世の憂時の友はありけり
前参議実俊出家してつかはしける
入道前太政大臣
身世と捨つるのちもいまはたれ友とかもみん袖そ嬉しき

けし

前参議実俊

思へかなしなからへてそ夜のふくるまゝにひとりなかめて

述懐の中に

後一条入道関白左大臣

いつまでかつきぬ命のながらへて吉野の山に住はつへき

弘安百首歌奉りし時

静仁法親王

花の色も吉野のおくの山なれと憂世といひつたへ知まし

題しらず

平宗宣朝臣

なからへてなほさもつましき身なりとも世にすまぬこそ憂世なりけれ

順助法親王

て捨もあらし捨もせぬ身はなかなかに何と憂世の身をなけくらん

右兵衛督基氏

見やはする花の暇乃身なれともいつはりなりとおもひすてなん

二品法親王覚助

背きそむ世の捨られ年月はいつの時のまれになりけるかの夏

藤原冬隆朝臣

うきなからいまは身にすてゝ夏来とも いつくにかすまむ

権少僧都沈実

年の暮より後のいかなる命の程にてかはるへき

前大僧正仁澄

つらしとも夢中なをなくさめしなからつゝき憂世なれとも

藤原盛隆

いかにしてこのうきをなくさめん夢てふ物としらぬ世なりせは

前大僧正守誉

世中はたゝりの夢にありしすれはかなき夢とこそ見えけれ

式乾門院内連

夢とのみおもひなしてや過ぬらん憂世をさへも夢のまくらは
ありあけ月ふくるまてうき時夢

太政大臣

いつもしは夢をも夢と思ふ世はいつれかさめて悟らん
しらす

三善為連

みえそても世のまよひの夢は夢もなよなよさりけり
よみ人しらす

世を海のつもりさそとめくらし見えし夢の浮橋

中務卿具平親王

世中は見る夢とそ思ふなるさむるときなくさめけさのあはれ
よみ人

續千載和歌集巻第十九

哀傷歌

題しらす　　後京極摂政前太政大臣

消えはてゝ世の人はなけかん空よりもあはれなるこそ
百とせあまりしのふなり

法皇御製

人の世はなきかすにましるはのよ物うきこの空たのしき哉

題しらす　　覚仁法親王

結ひつとふやくその水の流れはさためなくて世のうきをは
後の瀧流れて見さを行まての月にとゝめ

葵祭の日よみかけり　通忠卿の母は
かなくなりて侍りける年

修明門院大弐

かゝるやかあふひよりさせてさしも涙のかゝらぬとは
めし

右近大将通忠母

わすれんとてとみるは涙そまさりけるわれしはいよいよそのかなしさは

右大臣　于時権大納言

まこと　権大納言基忠母さかりの根と
とりかへりことかよはりて後つかはしてさて次の年

五月の日ねまちへてつかはしける

後光院へ　仁和寺関白前太政大臣

六ことて老の命はなきぬれはよまゝなりへてなけけ見ゐよ

題し　　右大臣

世の中は去年のうきねに驚きてけふは雲井に無しとは

題しらす　　大納言師氏

椿の露に命をかけて悔しきものおもひ入りける

新院御製

おもかけの花に離れてさらん事をうき世とおもひなるかと

永福門院内侍

ゆくとしもとまらん末の露ならの露のかはらぬ世に

亀山院の御ことをおもひて

前大僧正慈性

ありし御時ことなけれともなき十年の秋の御

秋夜の暁に歌よみ侍りける　慈道法親王

都への帰りて御幸の平家室朝臣によみける月の暁の空

なりにし都よ御ことをおもひくらしてよみ侍りける

平維貞

すみなれし都の庭に月を見し秋の昔の影ぞ恋しき

伏見院うせさせ給ひける秋亀山院の御事をおもひて

昭慶門院一条

うき秋のあはれし哀にしらせてそすゑのはて神無
前大納言為氏身まかりて後十三年にあたり
ける時誦経のさゝけ物とて

太政大臣

三とせまて消にし露の草まくらさてもとひのほかそかな
しき

前大納言為世

としよりふりにし秋の草枕露しけき袖のうへそかはらぬ
身まかりける人の前にときあつまりて人のまへにつかは
しける

よみ人しらす

消えての露の形見の言の葉にも涙そかゝるへき袖

亀山院かくれさせ給ひて後昭訓門院御くしおろ
させ給ひける時入道前太政大臣のもとにつかはされける

伏見院御製

名のこる袖の色にも我みえて衰やさらにときはなる
伏見院かくれさせ給ひける時人のもとへつかはしける

式部卿久明親王

ふたゝひみえしけふまてかはらぬ山のあはれ秋のなこりさ
前中納言定家身まかりて後前大納言為家
遠服の歌りすゝにつかはしける

後嵯峨院下野

君もやみぬ古の林よりも先に伝へん苗も伴ひけりと
なし

前大納言為家

都人何れ夜ふかくあつまらん時雨ぬさきの林の山里
同法印覚寛三位中務卿まかりてとしまかりけれ
林のさかりはさけさる人家と申侍りまゐらせしは

折ねてしらぬ山るさしの山吹の高尾のさかれ林あるも秋も
続見ん浣之妻之女郎花よまれ林の露よそまで侍る

新宰相

時雨さへうつろふ林こそ出てまた涙はまさる法の秋り
安嘉門院女房之女郎花よまれける時すぐる月の法

ちく時雨も秋かりけれは

前権僧正教範

守もる源氏の秋の夕時雨ねずみこそといふ袖まるぬれた
前大納言為氏かくまゐりて月の法一あかり
のあかるを待まゐらせ侍りは寺四季ことにつれ
待まゐらせし侍り

法印定為

いつまでも志るしありあふ林とその長月の花
京極院中之にたく年九日九月盡よまく
侍るとて御弘法に花さくよそ人まく御堂乃

うらみける所にとゝめまし

前大納言為氏

おなしく経にまよひまして法もさとりつ木の葉に
世の為まかりて懐にとゝけり

賀茂遠久

立よりて時雨もさらしるしをそ宇佐の杜の陰をたのもし

入道一品親王深性くまて迎にまかりて杜の北前大僧
正禅助にまよひつかはしける

法印行深

惜むへき日数も杖に蓄ぬとや春を洞の奥にあるらん

平貞時朝臣身まかりて後廟の時にとゝめて

平宗宣朝臣

りよみ世をすてゝひきかへて杖も後も廟のさとりん

薬師門院か時身まかりて後人の夢にみえ
てなにはは法の友なるちきりをたのみの所や
のこれとよみてまかりぬれは牛肉侍人に
たひくに海を結ひまかりける

山本入道前太政大臣

おなしき比ともにまよひつの友なるちきりもきたるぬる
西行法師か庵室まて寄花思故人といふことを

藤原兼平

すさましく人にもしられぬさても花はちるらん宿をたつねつ

左近中将宣忠かまかりけるにつかはしける

御ともに前大納言為雅なりける

前参議雅有

人の世は鏡にうつす出る日の月のやうなり猶

朱雀院の世になりての比

源信明朝臣

出てこの月日はさしてとりいれし鏡一つにうつるつれなき

人わかるゝ道にまよひて

よみ人しらす

ときまてなけくことを出て世をすてし海のたゝん

俊恵法師母かくれ侍りける時よみ侍りける

太宰大弐重家

おもふにも世のさかならぬことのはもすゝ

いかにせんやかてそむかぬ世のさかぬ

俊恵法師

いさやまたこぬ身なりけり紅葉ちらぬ

前大僧正慈性

人の形見に

付たる鏡の二すちの影のみえぬ

詠しらす

前大納言良教

はるかなりや見る影にそ秋もちる見ぬ人

前大僧正源恵

法の世となりてたのみをかくるまてにそこ迄もさのそ合六
知るも人かまりけむよしこそて

従三位氏久

ゆくすゑは法ののこれる世にもあらはれむ跡やうれしき
平貞綱母かまりけるにまかせける時よみける

平貞房

うき身にも法のしるへの力にてかゝる縁にふれぬれは
後京極関白前右大臣かまかりて後人のもとへ
申つかはしける

源兼胤朝臣

今はとて法をたのみし跡なれは里のあはれをしる
悲しみは
みちのくの心をつくす月の前にさためて世の法はゝ何
とありけん人ぞ法にかゝる

慈寛法師

悲しみは

おもひやるそのかたよりそ人はけふ法のかたみにかゝる縁

大江宗秀

悲しみは
風はらふ雲の高嶺は遠くとも人をも又もかくる縁
母のために法文をよみしに一と縁ありて悲しく

権僧正聖澄

よみける

津守国冬

よしさらはさらにつきねな源氏も見つゝまよふをたのまねは

無常のこゝろを　権僧正公覚

すくる世のはかなきさまにみゆれはそ人はまよひのかとを出らん

世人におなしく　権大僧都忠性

おなしくあはれにも出つる月をみてもかくてこそありけれ

平時常みまかりて後常にかよひける女の

もとに経とりそへて人のもとよりとをりけるに

平氏村

やまかけて岩の下まてもきえぬ哉と水くきのあと

従一位貞子みまかりにける又の年とふらひ侍りて

ときはなくたえまもなくて身をしのひ

法印定基

けんのたくひもありときくそ思ひきえてこそ

後二条院の御忌の程に人々すゝめ侍りけるに

法印覚寺

みゆきせし跡の霞はなきかけの山の烟とそ見えける

前乾門院中宮[?]

悲しさは

かすみのねのけふりやなにとそふ空にかへらん

三条入道内大臣女みまかりにける時

前兵部卿久明親王

立のかつ胡も雲も消えし源の名そえることなかさ
と東関白めまりけるにかけまて

高階宗成朝臣

みよ人くにしろきうの足も世に神さと秋の烟をも
藤原経繁の妻かまりて後義す宗も家
とうするとききてなからて海へと見え給る
まて人てまきてあまれてまてつうしもある中ま

蓮生法師

義たかまらの命もをしむよかるらうのなとはなん
井子はさまてくまけるに給ける比ゆ箏の名と

慈大僧正範

まことなく人とんきくうて変世のうつろひ
平貞時朝臣かまりけるとき人のうらひ
給まうるよしあり

藤原重保

とのつるてうちまうき海て源ふかき深のきて
まつきて給まうる人のしえをかまうりて給
まうるに文をとひゆるとあう出家とさしと欲
けまをもうつまうきを海と人く給まうに人の
まとふ夜とくりて給うるよしま

よみ人しらず

いにしへの鷲の御山の法華二てひきつらねし深きえにして

釈之法師身まかりて後夢に見えてよめる

藤原基任

たらちねの時をうつりし夜半ぞなき人の果ぞ知らまし

母の身まかりける時六条のおほいまうちぎみの許へ申しつかはしける

左大臣

とし年ありきる宇治とおもひし夜半ありきへそのこと露

後高倉院かくれの日よみ侍りける

常盤井入道前太政大臣

なき人の袖のかたみも夜すがらぞ露にてもかなし

贈従三位為子身まかりて又七日の仏事行ひけり

経をかきけるつゐでかきつけ侍ける

行潤法師妹

見ざりけるいにしへはあはれなるや浅茅の露のそばに

なし

昭訓門院春日

過ぎてくる昔の哀れや都より夜の更くるかな

為兼卿十三年の仏事いとなみ侍ける

次に懐旧の心を

藤原宗秀

今朝の詞にふる百のかさねへ重なるいみやまされかし

平時村朝臣みまかりて後十三年の仏事にあまけり時よみてつかはしける

平時仲

いきて世にあらましかはとおもふにもけふの恨はなほまされけれ

亀山院十三年の仏事の次母の十三年にあたり侍りける年月にあたり侍りける人のもとへつかはしける

前僧正道性

しるもやおもひまさると十年あまり三年の秋の涙を

藤原雅行みまかりて後叙位に加階し侍る

よし都わる人の中にて侍ましかは

前参議雅有

世の江の狩立のかたの位山こえてさく世とおもひましかは

續千載和歌集巻第二十

賀歌

宝治百首歌めしける時寄日祝

後嵯峨院御製

久かたの天の岩戸のあけしより出る朝日そかきりしられぬ

嘉元百首歌奉りし時祝

一条内大臣

民やすく国をさまれる御代なれは君を千年と祝ふなりけり

建保六年八月中殿にて池月久明といふ題を講せられけるに

順徳院御製

池にすむ汀の松のかけなから月もちとせの影やそふらん

祝の心を

土御門院御製

契りおく千年はかきりある物を猶ゆく末の数そしられぬ

行すゑを祈りまつる

後二条院御製

日のくにゝやすくをさまる代はよにたえてまつる九重の庭の朝日

亀山院の御時大嘗会日詠ませ給けるに

法勝寺の花揺殿太政大臣

引植て千年を祝ひしより老木の松は陰そすみよし

永暦二年内裏根合にて子日

前中納言匡房

けふはる子日の小松ひく人くやさ万代の春をかねて
契らす　大納言実家

子日する小松か原のわさみとり霞そたち世の深く
子日祝とてつへとよ海を行まつ

法皇御製

松まてゆやるひんりまの子年の春のゆふれ子日に
文保元年正月宮より給はる日法皇へ
西園寺入道殿次の年の正月ゆるく

行幸給はりし又宮のかりけるに去年と
契りしいはく女御くの入道前太政大臣の
もまてつきされまつ
春のたえや君か宮の中にしてひかれては世の初春
ことし　入道前太政大臣
ちきりつる子年の春を契りける年まて万代のあさみとり
亦下萬と　伏見院御製
君か代の松は千代にても世もかはらぬ春の萬代
乾元二年二月内裏にて御遊年友とて
ことしてはしまつりまつ時

土御門院

萬の春かはらぬもりみきの代に萬代の春
大内の山のはけまてゝらしまつ

前大納言公任

咲花とさしらの雲をまつ人ても世のさかにおも
建久元年女御入内屏風の時

前中納言定家

を世まくの大宮人かさしゝや雲井の桜句をるらん
永仁二年内裏にて三首講せられけるに
庭花盛久といふことを

左大臣

のとかなる代の春こそまつみえめ雲井の桜ちらぬ数
後光院の前関白弘安八年四月に
左大臣にめしくはゝるゝとき花契遐年
くはかくさこと計つ

伏見院御製

時しるくさくらをもさく若浪の立さへりともしらぬ
ゆかし

後光院の前関白左大臣

立かへる跡とや旅泊もまた時しるくまなれ
正應二年関白詔かうむりて五月五日

むまこへる菊し侍ける

後二条関白前右大臣

いはひそて結ひしめやかに君か千年をかけて結はん

御返し

後光院御製

あやなくも河へてくもつ千とせなしいふ世をやのこらし

禁中の内を

後京極摂政前太政大臣

菊のうへ花の下ゆく年は千年とも林のはそれあり

かのこゝも蓁つてまつりてまけるさうりえ

このこまいしとまくいふはねさす松虫の

都と小野宮右大臣まてまて侍れる

金龍院御製

よろつよとねをりつゝ松虫の一聲ちか世とそて鳴とは

寛治百首云をたのむ時林田

前大納言基良

風よりも民のみか葉の年々に逢いさらぬ世の林

文治六年女御入内屏風に山中に菊盛

よろつよをさて逢に仙人さす

前中納言定家

近き山ちる菊にたちよれはあまる世を契そらん

為相卿の前栽合に菊を

藤原顕綱朝臣

東の仙人の菊水の流とて千年まで経
にし安七年九月九日にさうし講して奉りける時
菊も妻久しといふことを

亀山院御製

千年までかはらぬ秋はめぐりきてうつろひぬよの菊の盃
位におはしましける時かくしたまふ

法皇御製

うつろはぬ色は世よりつゞきて千年かさねて白菊の色
法性寺入道前関白内大臣に侍りける時家歌合に

藤原顕仲朝臣

百代の秋の影をとゞむる池にはまろきよのこゝろきく菊
某院位におはしましける時庭樹花といふ
ことを講せられけるに

皇太后宮大夫俊成

もしきやみかさの松も君が世の長き花を咲ける
宮神祇祝といふことを

前大納言為家

春日山松吹風の高ければ空にきこゆる万代の声
聞ゆらむ

法性寺入道前関白太政大臣

我君の位山しるけきはあまねく人をおもふしるしそ
しらぬ位につきて行幸の日数のかきり御幸にはへよ
のそみて宣下あるましくなりてよみ侍りける
女蔵人万代
峯まてはたゝかましや位山人よりさきにこえてまし
正和二年二月春日行幸侍りける時従三位
に叙し侍りけるによみ侍りける
中臣祐親
手向して君かみゆきに位山又のほりつる春日の椎柴
嘉元百首歌奉りし時
前大僧正良覚
手向せし君か梅のさかえ山としもしるしの杉そしける
題しらす
従二位為信
君か代の千年をかけて鶴の尾上の岩ねにまつ緑の色
小弁
君か代といふことを尾上の岩ねの松にたくへて
性助法親王家の五十首歌に
入道前太政大臣
ときは木の尾上の山の松さへもえたを付てかはらぬ
百首歌奉りし時

法皇御製

あつめつる言葉の林ちりもせす千年のかけも松の風吹

ま秋のけふまてつくることのはのみちのみそしるし光

宝治百首哥奉りし時寄日祝と

前大納言基良

君か代の光そへてこそ出る朝日ものとかにてれ

百首哥奉りし時

前右大臣

くもりなき月日の影も君か世の久しかるへき末てらさん

弘元百首哥奉りし時祝

前中納言為方

月も日も光をそへてくる時にあひて君か世とこそてらさん

題しらす

平貞時朝臣

ゆくすゑの光をそふる万代のためしとみする秋の夜の月

為兼朝臣世とゝなりて

前参議雅有

としを経て思ふもうれしき世をいのるみちのあるにこそ人は

文永三年三月続古今集竟宴哥

前大納言為氏

わかの浦のあつむるもと拾ひきて古今の数にそ限

後法性寺入道前関白右大臣に侍ける時家に
百首歌よませ侍けるに
太宰大弐重家
世ゝふとも絶えしとそまん流久しきさかの池水
文治六年女御入内屏風に江澤亀有
汀に蘆生ける所に鶴立
前中納言定家
行末もいく代の霜をかさねてんわか葉の中の鶴の毛衣
百首歌召しける時
法皇御製
君とへん万代の友まさえ行田の原の鶴のもろ声
承元百首歌奉りし時
前中納言為相
君か代はつゐのまつにもよひこえて千年万代経てもつきせし
寛元御時大永九年大嘗会悠紀方巳日楽
入音郡檜山とよめる
よみ人しらず
我君の千年はけふそ山君か代のためしにひかむ老のかけさき
堀河院御時寛治元年大嘗会悠紀方
風俗の哥 松原

前中納言通房

常盤なるみどりの松原多はき本なる陰のすゑも
上ことし日